玄旨公御連歌

554
ケ
4

播州書写山にて
すゞりけるよ雪
あの様のあらし枕
わこよおりける哉
こゝく
花しうやみ給し
様のなすれ葉

正月六日立春
くれはとり年をみかけて霞かな
十八日於山崎長松院井尾喜六興行
春の夜のあけゆくは草木かな
二月十七日
いでゝみよたかし野守をたれの友
六月廿三日　加藤浄琳興行
すゞしさをうつ心のいけかな
天正五年卯月八日於丹州亀山惟任日向守
城初興行　一座
亀の尾のみどりも山のさかへかな
天正六年三月三日播州高御座刀田寺
にて
夏の夜を露はおきさくねの夕哉
六月廿二日播州志染水野興行
おさへにさそふゆきかぬ秋の月

天正六正月朔日於江州安土歳華元日試筆
あら玉ハ年きぬらしと去年乃まゝのみ
正月二日於宮内法印新宅之会
絵かけりてやとれとこゝハ宿の春
於物集女宗恩寺 後多聞院乃忌月二月
廿二日
山鳥のちりは尾見えてまけのかれ
山崎より月次之連哥にて所望よ
猪川よさよ風かふ木の葉かな
山崎井尾左馬尉年頭之会初而所望
よわりたるを
あたらしきを待しや春をせれわかれ
千句第八
やま松のかきの下風とりこ雪かな
天六二月二日立春の心を
あるとおもふまやめかさんはさかみ

正月廿三日久保久蔵所望に
竹乃葉やしもあくるよの初鶯かな
二月廿五日山崎谷乃ちるまて月次乃連哥
にて所望に
谷乃名のあらわいてし柳かな
久保久蔵新宅作りて去年乃会あらしめ
にて所望に
まちと宿ておくれやらん家さくら
昔勝久当国にまて陣集之時所望に
おもひしとおもひつらやこれきくの時分
試筆
去年ならし春をまつこそあさ霞
梓巣所願より発句所望されし
すみれわや神のいかきれゆふかゝり
かやりにいひやわらかに千宗こそわいまの
発句ハ小鳴まて連哥よろしく独かくすれも

同性好まへくしうて両よ象所におひなれ發句
所望しいそかしきおりいかゝと存ことさし
ともあめのうらいはやまわすくもさむありか猶に
人の心をやふらしとて苦しさくすまわらて
わとゝき次の名乗なきく

ほとゝぎす次て名のゆくゑやうしろ波

並恩ある所望庭前に楓のありとて

深山木の中よたけかやわかえて

五月六日湯津寶塔院にやとりけるに發句
所望まそこを独百韻をつらね侍り

涼の露ありさし滴たけの礎急かれ

五日本出をして詠まても一折性りもつき
ふしみて所々見ハ菊花に

ちさ草がねよいつれゆくわやめかれ

たし前柳浦の名まうて發句所望に

夢雲の山くらもつきさすへかれ

六月六日姪濱興徳寺住持和漢興行まてき
よしまて發句所望ありしに公儀に通ぎまして
出船とありし福よ性りいみえてうそて發句
をききして入数所望ありしに

うきうけの東風松の戸ありかれ

涼しきにそらくいくるや雲の影

廿五日一性りうて海の所望に

涼のおとも秋をちらし西の海

七月四日関白殿寓渡しわたりの帰陣也兩
まそ参仕をし候よ馬るとをもしさらは舩
よりて黄の海とめわれて上らんと宮待に秋
風日ともにおくりて出舟すまて六日まて
こゝまても帰りて心つけいれ

秋とあく風やゝ浪のことゝまわ雨

本由寺乃何有一会興行せんとうそきて

きわよこめくるゝ迄倦ハちりくるあくしてそ白
ハらうとうして九日
りの月をいけ一しほの本のまつれ
天神国府宮雲坊発句奉送なれ人
なとけよ雲こそ風の白萩草
大聖院僧正良政発句奉送之て十三日令
之御社にかゝる見の池と云あれハ
影うつりも月やうつこの池の水
十四日おも棚守ミ守興行もへきよし
あれしを玉まつり日よあつさきわ心つきるや
やゝまやきへきこえさひしりくさしく発
句せよと所望し出でぬ河あのあさけさ
あさやましろやまさけやまほとゝき波
竹田法印亭たかむしろ涼しきすゝしきよしあれ
しさら学て着きてきに函をとうすべき
りしをいへ発句所望や

名残あれ月やことつれとも弘
天十九
発句十四日立春を心を
いくとせて又たに任さ名のの花の春
菊亭右府　院御所へ月次之発句御名
代に仕之作下付
若みとり松り起の柳しれ
於一如院
灯乃て形のりとらる迄宮の森
智光院興行
根やなりけるゝれ藻門柳
卯月廿四日興行
さ月まつ花のかをりめる雨ありれ
七月十七日興行
おきれて虫やさこ彼露の玉すゝき
霜月十三日宗也祖父百ヶ日に追善興行
浅雪をこれ本まれその法くわれ

於筑前宰府思河見物して
人ぬらす袖ぬれ河やしもぬれ人の河
六月廿五日於筑州箱崎法楽興行
浪のおとも秋をさそふし箱のまつ
対馬より発句下申候八月廿日
白雲は雨やふらしあさき山
九月廿二日於博多宮野木食上人興行発句
下申候
秋のいろをこゝに山本いつき菊の庭
上総国照英の安部中納言基付興行有
廿二日
錦かゝる八千くさの花や秋の浪
甲府熊野宗安興行七月十六
雨と雲ありの山ことに眺もなれ
同廿日
末の露をやうつて草根の土ほくれ

七月廿日於信州木曽萬松寺興禅寺
月のこゝろ寝覚のとこのあさねかな
文禄二 薩摩国鹿児島ニ越年の元日試筆
年ことしをけふをとふやしあとしれ
於市来毎にんゐかわきれて孫亨まゐて
ゆわて織一折興行之しに
雨とよも花やさかてんや日の霰
二月六日柳川にてまかりて派のさたりそ
千句まつきよしまて発句下申されハ
あまりや入江乃月の御本山
肥前名護屋の方にてまたりしに立寄乃
状薩州下向の時各命をして文禄亨を
ひらきて始そ一會興行ありとへきよし
まて発句下申されハ
立さよしハきぬへそ冬そく人のぬ房
於名護屋天満宮万句本山紹宅ら按行

由ありて發句所望
春ハ世ノ又秋ハたのしさいろ香かれ
四月廿四日備大月須賀川兵川
蚊のこゑもすゝを火なるいろやかれ
釣舟廿五年追善乃連云花大椨發句
所望　四月廿七日
うけとめのよそいすはしみかなく道ゝ
五月五日
ぬきてあれこりに又乃きらの波
出雲杵築　對して兵川會にて東紀列
所望ニ袖のうら従毛なれん
おちらくるなみ帆もしたてたう
於平戸法性寺　六月廿二日
蓮花のなれはいころれ枝さしら
長門國府神主の家よやとりけるに發句
所望ニ

浪の花も秋すさうしれ草乎哉
發句所望静酌してきらて四日市と云所
まてつきて至りかよ競所望ニて越後者
なりまく云子芳扇庭ニ
心まやかりしやまの小松の菊
十月廿六日於結也兵川
あなをして本家なからし暑問ニ
天正廿　元日
うしとりて春をむかへし今年かな
所望祈祷乃出家ハ發句ニて足田右近殿ニ
いめくに家かしゆく月ぬハ
入をとらていはゆやまのん春の月
同月廿二日入唐餞別ニて昌叱兵川
一ノ舟親父宗禅廿有ニ而作也ハ懐旧之連
所望ニてきよしまて所望ニ松倉かわかきてを
ものかな

うれしさはのいさめやむかし郭公

平田の宿にて喜三子亭に

たく露に月も入けりあしの花

御崎明神の祠よりかゝりけるに神前に

くれよ出しまで射の串しけるに神前にいさつ物

田の辺りもと是之国のみか田比ゐわと

詠まて此発句亭に

いまも又をゆるのみしめの早苗かな

銀山慈恩寺亭に

花やさく岩つゝき谷の水

温津東塔院兵助　卯月廿一日

草月なくもしろやちきかなかとしま次

須田安国亭にて

石見にくさ〆けりハなるの玉藻かな

松由己兵助　五月廿五

五月雨にやせし風すゝし　八日々け

山中様門亭にて六月

蝶のなきやうめなしくれの杏浦山

八月初めお弥長

おさらに急ぐ波さうをさゝやいつれ雲

九月四日義久兵助に

ちよや亀ん末りよあいとひらきの庭

九月廿七日

わてもんのらやけのさきろう鳩

十月十四日松林安兵助

本ゆしも月よわしまあく山の花

大陽京門八幡宮部落之副社家乗帰尼

岩瀬発句亭南庄に

山風をかけきのわれおちくれ

唐門那城逗留之中重兵助まへつき

よしさわに一寸しまれくれとも時さ

くゆ野らし抑にきこてとまつさと辞退

しるべとさしハ発句ならすまとえ
神無月さむくなりけれらやこゝろ
十一月十三日於抱琴亭興行
冬木まておもふ人やあきれ除となれ
鹿児島の人とみち霜月中旬まてさらわまれ
是山而こ　雪のみしぐるゝ
ちらてなつ而を出り　雪やおもて秋景
於花人亭の興行　霜月廿五日
花のゆきさし　りともしろれくこ之なれ
天正
六月八日利休居士而関白殿御まて志ハ
しの秋風まてはらう一折とら相催し発句
はつきまりるへきよしあれハ箱崎八幡
乃心を
神代りもありてすゝし松の風
廿七日関白殿花瓶あまこゝろありてこさまえ
草花をいけしまうらの庭前まて織一折

こゝろ催て発句つかまつりつきよしあれん
夏草なりくらめのかるゝすたれとなれ
春発句
春風をなしさてさらふ柳なれ
下草乃露をこゝを志乃柳しるゝ
河風より玉藻のこよりやるさき
河風の夢くなるすこ谷のなれ
梅をとおもひおハなけまくや花の梅
梅をまり若子にゝつとも国重なれ
柳をともたるんつさきりわれまく　竜子
むかけなくらや出来るめくれもなし
雪白し　秋のもとみよ山の嶺
けたまこう　枝ハねうハ花さかり
庵刑　明院右今而こ使挨こしゆるての金子
このこれ特をやうかし　家臣
但右法楽十万句こ

浦ことさ雪の木の間ハ花も影し
ちりそめの木の葉の月ハ秋もなし

夏

なお枯のゆふしし草の萩の露
おしよしちらさそうあれハ時鳥
右方様の入洛の御備乃御役ニ濃州より下向
して道有し中ニ夕暮　典則
ゆきやらぬ山路ことこそれおとこき次
越州一紫の谷まて　梅花　典則
一声や花の山風ほとゝきす
私貧た佐孫殿新造ニかへ人とこ様へ
ひそかにしに庭前て雨宿に
うつくしハ姿の根さしやあらみ草
三階雲　典則　四月五日六日に濃州ハ
そのわすらうて
すしさとこのことを庭の草あ

京寺見梅よきかわしにも立けゆく
りあくらて雨宿に
深山ちよ志れ人はうちとき次

秋

鳴わハたゝあす雲れなり
冬十月朔日雪のふりけるに美濃州　典則
きて俄　典則
雅月雪とらやこの志られ
ちりのうち枝やけりかけす秋影
うさ草のかをゆつれ霞勢つれ
天正六年江州　安土御年
まちう、ぬきけ達をたく年の書霧
同七年
けをとしふきや　ふうくあさ霞
同八年
きさいつしきさ人の花の影つれ

同九年

咲かゝりきやむかしの雪のしたみ

同十二年　八日立春イ

立かへる春の日影や八重霞

同十四年十一月立春

はつ春や十日あまりのかすみ

同十五年

長閑さもまたこの日のことし

同十六年

いつの月さやきしの花の庭

同十七年何ゆゑの色を近しわる人の

年へにし老の鶯の哭ともすし

同十八年東の陣の泪大きし

ありけりとみよの名残のかすみかな

同十九年

うらいして春ともいふくしき風

文禄三

百花の春にもさわや春の雨

同四年

立かへる春年にことしの春霞

同五年

年へにし春かえりてや八重霞

二月十七日於多門

出るらよ三かし神守と花の友

堺南浜天神万句発句宗仰府也作名

前ニアリ

梅の香をまつ風はさくらの色の名

如云於昌叱興行

夏のおもや花の葉かきつくる苔の庭

正月七日於山崎一折一葉興行ゆゑて不

望し一時代作に

雲雀しほられ摘むけり水のには

三月十七日於遠雲軒興行　會子

風のうへ花の色なひく柳かな

五月六日前田豊後守興行於和泉式部

五月雨乃新川すゑも山かな

廿日於寿隆寺

五月雨の名かゆへ三雨す続かな

六月五日大坂於守花田安津守宅会興

行

すゝしさをまねくくわの扇に

八月廿八日於愚宅興行

年すらや塩なりつゝす御浅川

卯月七日於東福寺不二庵和漢

ちりて花るさあわこゝの落葉かな

山端よわ月吹迷ふ所て所庭に

おこアリ
銀門りさよ風みふ木の嵐かな

天正十二十月十日

月彩りさる涌川乃さよしくれ

同十六年同十九日於愚亭関白殿入御

治まれる世やもろし〳〵百千鳥

同廿八日浦口大炊頭宅会興行

ひともとの梅はもちそれ菜千子

松木信尹例年発句亦遣しおとしも

又思あって下をつきかへおこせてき

ゆく廿日終りの程すてまさしき言葉

年なきて

雪きゝて花にもれたる深山かな

廿五日於三門清下月吹の過去代絶に

花ならし柳り白く風もかな

元亀元年正月初か於濃州明院興行

正月十三日立春と同乃元日

年ふたこしぬいくちるもて来春

二日濃州友閑興行

閑あるやなうらひとれやまみ春

十九日長南坊興行　里坊之井此森庵にてしんき

霞こそとられ木の間の春の月

大方　湾江秋帷行

春ハ手をかせれのとるすき柳かな

江州矢橋よりの舟中にて

江乃水みよりハあさき柳かな

四条道場万句

一年に花のみるさきさくらかな

七月十七日於板本明智伽新宅

花ら木に蓋をやさしん枝の色

十二月四日於吉如堂蓮光院

雪と花ふりちらすふ隣のひさしかな

元禄二年十二月十二日於矢嶋勘之丞新宅

雪ふりなりとゆきありよそかり新しかな

於丹後成昌吨下向之時

蓑袖やむかし花すりさくらの枕

八幡宮ちりさき近所にわが所望にて

浮世袖を打よる人とよられけり

田安言通従薩州上り所にて興行

めでたさのあつくも雪やはらかくまれ月

言通興行

花見しいさすくさめに岩の雪

於言仍興行

道ハすと隣あわりの雪のやと

奥山佐州二七日にあそびそ庵興行

懐旧之前

袖ちわや霧ありかしかしるる糸柳

聖の柳御興行　元禄四年

春風ハたてすよ竹乃柳かな

於伏見宅山園石阿興行に

江のこゑよ立ちし柳を得さるさ次

吉川氏人お宅別當ダミ城興行

椎柴しかくれぬ霜のうらしみかれ

牛松秋宗粮二十三回忌日霜月十二日懐

旧之逝去の備本因坊興行ニ

何ゆゑくやうらみみむれいくめぐる

丈五日不知丸秘く執筆まつきとて世足

新御興行　元禄五

梅が香も本の入めへき新来かれ

五月十五日於河曽部宅

むしろ草やたゞここ萬の花の庭

九月於長岡興行

住よしこゝる霜く人松の山嵐かれ

十月十日お兼如興行

うら霜のうとめかり久しかれ

お幸前興行

友ちらしと雪く人花のうらやまさかれ

友人家をみにゆつわて後会とて下旦六月十

五日

すゝしさの風を法とする草木かな

照三院一之興行しゆえそう発句法かり

よつるつきゆゑて内催ニ

花の香の月終いそぐ雨間かれ

一もと松の梅くあまり草手かな

如水古淀附東紀州興行会ニ

友とつやくの心ゆりよくの雪

懐旧

もと深の中の一座夕を秋袖の露

日

ちよんことそさうしにさふ本の香かれし

小あくしおれ雪まみとうく露かれ

西より月を今まるすさ本の間かな

於東条紀州如水饑別之附興行ニ

おる枝やはじめあいさつの糸柳
右は毎月三日追善
明やすき一雨の夏はみどりをられ
右は毎歳七月忌追善
蓮の葉は露さん玉のしそ子られ
みゝるひさし月給露は草木に
尾とするゝあ雪ともやすし梅の花
花の露たしいとそ雲やさつ乃風
曳也追善の千句興行にて　璞古勤修
下句
ちりをさにいつまうへん光の露
惜別　書写山に月かわりにたに庵前の桜乃
りみちにかゝりと見て
萩の葉よ秋風ゆはる扇かれ

春部

都よりはことなりけりおさまりきん
ふるやころうしゃれとるすみ
しるめむりしを雪新りけり
うはわうし雅代ちんなれ都の春み
うきみのさらぬするひるの了急
かるかましけさあるたは花実こて
こ色ゑるゝやとき梅わかそりなわ
きれふゝえ男くらり花の雪
かるる中をとなと思てたをく
まくひ春寝ぬよのたるよ夢りて
松む乃おくすを花や夢ぬらん
希望都よりたうさき草の父
わかれてたりも明やらぬここ
横雲の底のやしに宿かれて
あくりうはもとたてまれ花

いろそへて霧たちかくす花の色
うつし桜より匂ふ梅かな
色かゆかり移へし水をはなさぬかな
春ハまて心ゆかり心をうけてかはらぬ
さくらにもたれをとふてきぬ
春しれは咲初めにけふ春しれは
かきたえつゝさぬ花しらぬ山かけ
枝りしてかくしたれさく
すゝきをまねく萩花の露散て
いろ有ける梅のかや袖のまて
たゝひとえさくハゆかしき花のかゝ
色ひて花よりも花よりもつゝ
梅のうちねの葉の下かけ
うつるかも君か明ての春
月もまてゆくかけなしと夏深く
河よゆかさきれはさへ

月のよはゆかしき方よりも花の色はかの色み
うつる人の名にはかくあさくらのかけ
こぬかくへ小松の若のまに花ちりて
露のいのちのたのむともなき
ふく人ハ所をさつん花かをり
うらむつらひよいつまてとふ
花ゆきとこそ申す花をく梅か山
おもひしられ花ハきえたり咲出て
さしの色ひの色こし丸鏡を
をゝしきをすけて鶯かなく
いつくにひるわのよくもおもひきて
うちとみる人に明けのいろ
すゝ沢のさくらハ名なりと花の色かく
まつほとわたりしとうしきくいふ
守られも名春きてもやまかくまし
花の香もおとろかさるゝと梅の夜

梅ちりてよのきれけりはぬめわ
それはらみあらしのつゆにさそはれて
こぼわのひりにまちさげるすみ
とくもかきわれまつすきさく
たる花のえこすとなるまくろ
ちらんとこさはらぬとふめ山
花ちりけるは岩ふむはちらおわ
籬の胡蝶いつらいよるん
見のけ乃けさみかとまとさし名わ
うすきよし日のく晨乃山
くろきや露れこゝろも世のくちる
露後つてはゝ山めくらけさ
それゆゑさひはゆくすゝさめて
かくろんを得みの花ちり日は暮て
露ちりかくれよとの川舟
やさしけを阿ゝり季の色

宵みされ月のたゝこちら書絵て
ひうさ出るうちはおもろなわ
花よきて袖ひさろく下かしに
こしるんのちらし五るあたゝなさ
それは雷とかりて人を待侘て
咲らくもとおち思あらはお花落て
まをさらしき新乃ちり似し
人のふみるをもとゞるしを茎生たり
ものあはれもくしくりさら
いはれをましの旅つゝ乃さう
ちりまそと山の花のあかめして
それはさて夜乃終しよわさくる花
春のあはれ名れぬみのむめ
ちりくれを柳の露みけとめて
梅 あくかつきさふ川乃みを
おもとしさいとかよ花を向もうし

うくひすのすくひの梅かえ
まさのかけのうつろひをあはれて
人をけしたく旅のはれ
まつ山ゆくりすもひけり袖
花のかをそ送る行くしの御拝て
いそかに郭のいさゆやるめらん
久かたのあしき木れの春雨
うくひすの音まつ靄るを山路
明かのあと帰り霞にもたちわけて
霞けめるれ山のひとさか
らいはたく花れ木の万乃初瀬寺
かきをしまれうきわするゝら
鶯れもゆれけれのめく霧の中
ちか出の椎の葉ふれ花のいろ
まされのちをれ山かもしえ
おちぬるとこゆるまそ霞の流

うつあはれ水のさにくく落うかして
こいもそれたる春の松のさ
形ちやまそうつもれもそし雪きえて
うれこん比をつきこと春別人
花ちわけれとをみよし野の山
まちとしもちらぬいつわ桜さえて
をゆらうちもよしうつろさのいろ
うへあくもしもるのかゝうものを
さくられおくれ秋のこおこう
りう一定てぬ一本の春の花
いつのひもへうの山かもしあと
くもをかきわに弱なけれなる
花さけとしあわ山の奥りきて
たれさのさうひをふすうはる花
うたにまよる荻の篠原
いふかして篝りかきもけくさかし

うきしゐえしたれ明ぼの八景
おもりかへけるうるみ村く
一二さしたゐ日くわ敷きて
さくらのくもりちらきさ松風
あさい文花ありこゆへき家のや
いつりよすきん人のおりけ
うへしよも葛ありつらふ春の花
四八ろるの都ありうけらし
さくらちら池のこゝろの水すゝそ
やまとくあへ江まのゑれ着
かわ衣寸そのく露ちらきて
賞まの一言を去りわよむこて
里八殊らのうまし一くさ
電えくひ引石のとゑく
舟寄りとも所のゆくしにあつときれ
物神しきさ志のつら浮

春の日れあうし山の花併く
おもひつゝてあきさ八花ろ人の心のあ
松とおくをぬ庭のまち風
すゞくうけてせとえや八屋をとう
若御山ゝを吹ろ所のおりかして
松むしと花の木のれゑよ吹ろあれ
霧りきろき本りれ川流
月の花り影のうれさゝ依そ
梅くあうしくえしてたのの柱白
うれおりひけ八て流しくるる
ゑそあきる小意の為ろあのさ日あり
いくはくの草れるへしさ
日くけさ寸さうひ何くさけつそ
うしさく見れわかん
一もとをゆうさぬくろ所のあるしまて
若代八らうもつ紀あさ家

山くろ思れくさ月風すさやかれ
ちらり散るてぬけさのあかねさ
よこ雲ハ咲ちふる朝の本みけれて
末の、りとみみちらきゆか化
一村の雲てあまとろ久いつわ
おやのいさかれおかりくるれを
関ろ父ふ花の本本あのちらさめし
ら傷、やそわかれねすろ花の月と
あそりなきめるそみくさるひ暑
たわささてうけえろくく西の露
蔵りうふや流しるるん
あきまのかまととり恥いとの朝しゝ支
花ちうまくもを妬るれ風りし似て
さるねわ心ハられよさにさうて
芳きさうく一聲の梅のえ
もそさわし若よからうゝ人

去年のまゝ命うけ流ろ花咲うく
ことみのくれ村の名み霜
妻あふを宮ゐの氷室のふうちさて
うらいさき村の月よりをおちらく
まえらうもましる花さるれ
流りうさうこ八露のまと、く
うとうゝぬ西りも花のまゝ行落うく
たくひるより心の猿や去うれらん
海ましくろ庵の一流ろ
父ふすハたるきうあ雲を折しう山
露りきえしあきるのく雪
友ろふも養老弥の名の隠
みよわくろも松の落すと
霞の衣らむすさや天
うちさうふ花り何弱れ雨きって
土ろさゝ路のられるあ乃梅

うらひまの霞なり明日と待わひて
出るより紀霧のいろわかれけるらん
待かくされとあかねさすかな
麓よりわけ行越の山
めかれきぬさくらちわつむあの下ゆ
くもつしすきこりし光れかな
思ふつしまれ名高り咲出る
またとた〱深谷いあさされ久きわに
いともとさくらの花の
まよふわ名われあらぬも草く
うむ日のひかりを空の戸の中に
くあらき花もとおもふこらめされ
雲れたくよ大かるつらされ
詠りきやこりかきわを待くて
花のあれあともまれの言さ
さらぬよわもつゆれ花のたと

世のうこともりかけ佐保の柳かな
おなしつゆすさも佐保や家く
さくらの色りさけらのかぜ送て
うなひききそりん月来ぬて名わまも霞
柳ちりて春しく若草
日影金くうけら小路れた風の遠
まの水に鳥の聲の吹
この春霞かすか出らくまよ
けふる野辺のかりま正月
雲のはれ春の雲いさ
水のあらも川いあさなのつゝ佐保に
なとの乙のひよいつくうかし
たちさくといつへんたくくらやまよ
立つゝも友のわかれめかそて
ゆかりをやゆかさの花よかりとらん
ちりは何もらかれや咲ぬらん

梅いさくらうきの下あり
おりふしら見るへき花ハ三芳
まかりるすみとをさらくさそつさ
春の夜お月と月の川上
桜いろのさかりをうれしく花ちりて
あやしわか仙人のた
うねたさるへのこさうる花すみれや
常なりハをのかゝしられ露まして
ちりくるをとの古郷の下りけ
きくね花るくれりハいまハ逢さらわ
ちわつらしさらしの山さと
うれゆりわそときくたに声すさき
さほちら花の山ちれ雲の風
よくつをうるし露の池あと
若まちら見りとさくら花ちりわて
さ枝つれさう神のくらさ

三わしら波これ家つとおくる花よ
まれきたわかゝてその春
あさらしき言をむするかし衣
うものやうわれしらめてや
夕あらし吹ちらめくさ霞はて
はなからみを送わすらさる
面のえハこけふらわにけりとて
山やましいわきりか花のな
女すひゝ花老のうくひすを
めか香をさらきそい侍るこゝし
これよおちるむさてひの春
面きすてをて世へみれさし
あさわつてあき山ふ給のちね着よ
人みのやとかりてこひしや
まとひもいかぬ花なんあらしや月
一夜かりさくはいつきりちりさく

しばしば花みる彩の山ぶき
あさなあさなりふのきえけれぬあはれ
きるハさらてをちりも彩のすき
よりほんくまくかいりまもいよと
寛かしこ御かハこそぬあしろ本よ
さわし佛乃あはれふかく
あかきろく勝ぬまけれ和さつわ
すゞのしあさし名をさらさきん
一ろと寛ねうろえすのしはく

於昌叱興行　二月廿二日

紹巴
昌叱
白
雲吾

古事をさしたかさぬ去日あれ
人の心やわかれ行あれく
秋菓をうらしうきねまかしあて
とまりみをさる夜の三行くさ
花まちまさ戸さしゆうとかこいろ
守き花の桜のえさをたまちわて
くれぬまえ世わねしきさ御すれ
すこしなれ花の秋の夜のしすも
月まふれころとまつハ久保しぞ
くもたゆのいとや袂りみるらん
宮わとハさの梅ぬさみうよみ忽く
まの人つりにきろうけらん
かいるうこきぬうろさの谷
月のしをうとみのここやくもろし
あくまるハちきわあまさはれあまや

ひときはしるゝぬそての色つき

夏部

みすにすゝうよこれ川舟
おとくき浪にわたそてつゝあくるよた
夕山ちるきさ庭乃池に
ほたる飛蛍帰きさむ風薫く
茂りあひあるさらのうさ草
川本咲きはの柳枝さまそ
のこるはさきまるうれえりしま
川ゝ人いねりたの形象
ふ茶りや竹乃さ枝よましるらん
似わすてうき亡くりう瓜値
名佐きうきのいるくれそのさいて
かれをちうき麻の子ふき給
松のきや夏衣も見よ兵しさん
をそくさくゝい若葉のたよる
速ひのはさくらよしくの袖

涼しさをまねこうちはも時の風
おち川水の流に入をと
夏すゞしやすらの跡のむしろくみ
いくせりなかめまの河辺
三船しといのかこし満れ夜舟へ
新樹あらたにすゞしむろあと
夕立の雲さわけする月のかけ
さらさまたくわくうれこゝちら
志川のやれやわらしはいさを経
志けり木の下蔭のなかうけ
むしたくくさらひのあら風そて
とりん日をましこぬ人よたのめさき
郭公川三山のさと
水うつ入江よふくる松風
前を招すしき月よ舞とめて
かわにさる志りの○い○んわ

雨をゆふべにまのゝうらつゝ
一むらにある竹の○○く
菖蒲ふく志けりそのつよ風落て
しられめさぎの鳥舟の岩
梅雨の志けりの下露の川おちて
夕立も山のあまきやめ夕陽ん
照射うりしをうとこすしき
はくわさくふろけれ荒小田
五月雨よ志川やれさすけ打られ
夏草のさらひ村しみれあひ
野中の国西へすそしあと
あつなひわれりあまりさやけさ
秋露ふりみちれ営やまはうかん
ふる衣こそうすうされたうわれよ
みあらきうつゝをへつきれこら
うこゝうしもふく[illegible]きあをわれ

くさくもみちの夜の内
晴ゆくし　早苗うたう
さつきいさる月のちるを
そくみの板ゆかん　郭公
たくいもそし晴やかねつ
いきるき杖を添ふ翁や涼しさん
あつさわもるゝ河水の流れし
さしよする柏木のかゝり焼けたて
なのみさる涼しさそしも吹
末そこのまよをさよ小雨すれ河
うちこもりの声れにありさ
住よしの神のみしき早苗か
かくやさよさてもきこしさらん
ほとゝきすにてよるも近月の影
あれなかりさうさのゝはすゝ
せきやるも五月雨のさい田も
あさきは葦すゞしねのとこ
手枕の手ふやそしまれつきて
よるの中をおもしくそし中
五月雨八千もりやすいまゆる
すゝしさかなすなかめのそて
[illegible]

出ぬ月よまたるゝほとゝぎす
妻恋ひしらなくおとゝきこゆ
明やすき羽黒山乃月あかく
あしたゆふも羽山つかする
葵をや花のかさしにたるらん
あやめかけさはもそろく
おもりなふごと言のそれ
山をうけめ文之はめ
ぞひくわすく蓋あしつと郭公
すゞしき風の吹ぬハよるわ
この杖を日暮れ着やさえらん
あけさいわもりゝあ山すつ
くつを谷の氷室のまんして
くるやいつこうちつはわかね
もしあしとみしをまくれしなわあひ
たゝ一夜いつきの文の枕

いつぬるけりか文おふい草
並ぬよかくしく枕ゆまくて
郭公さけまかしたる露
うきはもちわる下つさよの枕
からゝるゝ羽の山郭公
山りすゝしとめしいつとく
たりため守を氷室のはくらく
みるさわおほかれつはかやかわ
かつか火を離けよるきつかひの舟
五月雨　門をもてかえすさもか
梅とひさかの三かわそかけ
えゝぬりのまゝ　舌ハるわるき
花かうも小田のうへあしまきれて
霧のかゝり篝あしもそるる
ふきつるの露たてうたゝうかわ
めくるもとやさ月日をそへし　也

うくおくと志ハうる田つくれ水車
すゝしさハ風うすきえても木陰ぶ
三谷の氷室りもとをしみち
山すわ山れみちのさうしさ
峯外 谷れ下暗うら志ぐわ
意つれ茶つゝ立ゆうな
明ゆうすの雨れ人るゝ郭公

秋部

さしまえおもしき花の萎
萩のうにおきをおもゆら風うれて
むしう雨とあらしれいろぬうれ月
うしきくうわり志くれをし秋
すきよりうれけのたらむ
日くらしれ声や久をさらうん

雪のまうきて蓋まてわくうち
三うさ氷をくしきのことと月さみく
月を出くるも雨の中の天
影たうき社れ當れ滑やかて
たゝうれめく風の枝とうとあのしうそ
七種の契の業ゝくれの色
おもかうすゝの露たらふ袖
あらふやとわをくわれ音に帰るく
寺ハおくなるら山そろうけさき
小田舟や雲瓜のほの若風うり
雨よ打くき寺らうあう
さをしゝ氷筝よう方に妻こめて
つくそらで以月のうき雨
山るに秋のしられのさゝくれて
りまうゝ山風の堀不かゝつさそ
けひの水の月れさひしさ

つま庵や雲井はるかに見えつらん
うつりかはる草の山
見とかあるゝを諸はまりきん
古さとの萩の下をもうつりかひて
秋のしら水のいつる也ん
桔梗かるゝのりもちれ中にあらはれそ
ふるさとにころもうつおと
ふけしさや秋の夕暮の山嵐
月をあふけて立そ出ぬる
さをしかのつま恋すさき妻やこふらん
松のしらべや秋風の浪
かのうたと見え関のなびく花すすき
雲間よりさびし松の一もと
さゝ波やはるてらす月の明るらん
袖をしほりそきし秋のむらさめ
野の萩の露のよるとまくして

入さにふる有明の月
さをしかの妻やこふらんとなかるらん
秋とうたたかしもかはるらん風
ま葛はふ夜と秋のみるわきそ
松風もさそはれ出し月の雲
のころありさにさそしぬるつね
明るすさめ月のうとと雲
くり枕おし妻こふは鹿なくて
きかれ語る風の音つき
夜ふけて古ゝ見し山の村竹り
あけそめてをたるそのもとに行あらて
おくつゆ月の露の萩(はぎ)くらし
くさむら月の影と風もなき
雲間より見へて梅原桔梗原
うつさやきさうおきれての露 康子
袖をうしとに秋よ鹿子の立出よく

のこりあけさにいらぬ園の戸
秋ともまさるやわらかみふかくして
ちらしあかしにさし庵の下急
波路ここをとこにも秋の風ふきて
とら玉し　空をこしもえ秋の風
むらにしききさ露のつゆあと
月更ぬ逢人ぞく　ろ袖
さすらにしかくきぬ露れ花すすき
京のえわや日ハうたかかん
又前乃文さハ雨にくろひて
新ハさりかとゆふ月かけて
志すしきくれ鶴かりの露
日ころのつくして仏木りくむら
傍ふる墨や箔梅をさむしん
嵐の秋のましきに時雨らん
有みちうけち山松の下急

霜を思ふ春をしなからにけり
いつしとある色をうかり月見ちて
ふる夢風のかり来て寸こそすれ
かれ露まけ露のしらき
一とつく月のあきをそれ尾
新さこ荻乃くのかり露をそのを
露ちりなきさしくさ袖の上
鷹すけ人のる枯ちりさ花すすき
ますころりやけと袖の月新
一ふさハ松花かるを枯く
竹のくまれ手そらのこゑ
又霜ハ工つしか頌れ月まろに
くるのかなり車乃くる
きれくとよされや月よ如あらん
きこにありしき花や仙人
箱まことを庵のかわてきて

こゝわれつるその里のくるけさ
あきつまれ川辺よ秋の日ハくれゆく
ゆふさと月ハかすかなりけり
夕ぐれの庵を失ふあはれあつさらに
なほおもひぞ思ひすゝしき道の末
一むら夜の萱のくれの露
きゆるあとよりあらしなかりつる
けりくと積り行山のしらねの雪
落葉したなきこの月のうかひつゝ
色よきわが袖りちりつきおきまれし急
庵の蓬や埋もれてと絶さらん
志るべ、秋のくれやましけりやなり
こともなくさしハ月のあけ
見ゆるはてもなに虫の声きえて
只々くれくるを袖のおもひ
独ハ霧のあはさよなきくれなくすき

わかまこぬ面を月ハ見もつゝし
あけ衣その川波よりらかきつく
行かたをおもひ来るの雪帰りもく
ひとまをなくす秋の風の音
樹ゝや面さへきゆる面への霜
りをを帰るべハあきをなの月
みよるりの梅のやらうえ多く付
志ん秋のまなれまでそのいさかすて
荻かえれ月めてあるハ袖みえて
霧のうへなるたかまの山
たらふと露のいけさあさりふ
山さとみさわと秋の地とおもひて
あとさらのとなきの一層くれね
このあききいるおもひをとわれらはわかれて
さらに仙中の名まさの露
志る蔦のかえを見えさぬ紅葉りて

こゝろゆく風の音秋あはれしられ
かくこゝの利休の人々はれ乃多く
唐の音や明くるまそもさびしさん
しら露に秋のしら山しけやけ
友なふてさえ月のみかけ
日数のみくるり出れあさくつく
静かるかまた心のすゝきわすかり
人さりや荻の葉のそよ風
心つくしに雁のこしいく年
秋ことの夜半乃月も袖の露
かくてきゝて恨みくらや宿らん
夕暮れのまたに宿り月をみて
聴ぬしらぬは松風の音
露の旅たゞれの月は袖つきて
見かけたる花は浅香山降きて
山のたけくに有明の月

雲のひかりかくすさ月影
いなかれ露のやとりも月あかく
さひしさもなふらてたなくやらす
秋更てすかたかけこの露
露はおくかけもちるさき萱屋
かけさそ田のひさしかけ縄
交るかわる月のさよ風
すゝしさとあはれし露秋をかへり
秋のいろかりもりすき雲くら
民のかけかけているはかへて
さらくは秋の三ケ月のすそき
雪ふりくるかをれさきぞ
さひしきは田舎かよふ庵の夜
庭ふるくかりかくきわくく路
雲の下けも夜をまあかり
こゝ御乃尾上の月のさつきそ

雨ハさらに見ゆるおきわ
入海ハ末ハ野ハ尾花のかすみて
此の夕日ハ霧にすゝきわ
稲妻乃ひかる月に月の照らいく
本くりちりくそらく萩の上
ましあらき小鷺をはらひ久かた

冬部

くやらいしほのあらき浦風
磯山の松の葛葉の一しきれ
ちらかよひ淡く一むしのみち
杉木の日らい葉まいも落ほて
ほかさを志めて雨のおりけ
雪ふりつふハかね氷る出来り
志めおほくもさく芦垣のあらハまて
くしも浜霜の下くさ
みましくはの乃すゆるの絵
木枯ハ松手のいらやいまうて
霜月ふよみれあけ明の月
雨る儒ゝほ原のちらく枯らく
ほのやさしくまる里そめらく
あさき川をやまいうかるる人
霧みちてあり明まきし　星月叢

さゝ葉のしみしゝの音にゐ
行ともあらす子ゐるあり川なは
りすける冬田は鷹のあるに縄
物の跡ハ付もなし人のたえ
水かる田中にはあせの落さかり
あさ比は氷となりも見せし
志賀の浦の葦の松の冬にけり
さゝ浪しかやにて冬月のうら
こほりを絶く浮かる雪の日より
とら山辺の人なつかすなら
鳥叫まり冬くる鷹やあらそふらん
あまつくも行山の雪は日より
袖さしいくたひ鷹とらるらん
夕日ちも帰り物の雪の家ら
水かるはさらく鴨とわの
日けし鏡あつらふみへの霜

冬枯はすくさかりくも刈りてはく
冬ハあくまの三輪山乃雪
まとまりの鷹をとれるやまて降るらん
なまつきおすゝめの上
里人の雪にもかふみまえて
冬月の夜ハ晴る富士つもれは積りて
雪の人なかつくのねの雪
むかひのきしは三輪さか上
木の人これ落るとしりは山嵐
あすく田面やまた降ぬらん
夜しくあく道とて更けゆく日よ
さらふあとよわ雪をのきさけて
冬枯はおゝかぜの風をあさこ
浦の朝みもおさまりけり
村雪は冴え朝月もありかて
雪もましまさ地に富士の嶽

吹たゆミこの木かくしは露
月の便風やあらしのうらむらん
木の葉落葉ちりなて山松
入しほやきてハ月の色
見かのおきれ下ゆのおもかけて
袂ハうらゝにいれめりうて
鳴こゝろすゝめて雉子帰るて
蓑をおりつゝ中はさゝつさ
りしきたゝ世の佛ろとするして
はつるかと見る乱あき秋
前代まかれしいさゝのやなくゝ
りえりつくろふなる山
見さけと胡河面をしてはも
さとさきをさしれ木はたれ下風
白舟乃落葉かうへは露さして
御まへのみ来みとうちゑし

○まゝ白壁ハ香もきを茎の外なれて
岸わゝく川も見ゆまり
うゝはゝて許も使のね一ゝこれ
ちゝりわ返さん後し宮あれ
かゝるの衣の香紅まりのかけ
けゆのうき朝まりまゝ乃りく
きのかゝつす雷まゝろきかの家
しゝのやよるとまつ神ハいさ
きミ一めこきりのすゝきみゆ行て
宮ハゝはまるの上ゝ文ちゝて
枝もりまゝらをの井ノの衣
あゝゝめすみりかまものすこ前
宮のなるちに夕かるすこりハ
おきおやゝはゝさきさき山
何火をかりまゝて衣なゝて
使もるゝ之のしゝ宮のゝゝ
さすへき三見の薪ゝのゝて
なゝゝゝてこきはまゝゝ水
何はとあゝまやしのゝゝゝ
神のゆゝゝれしゆるも白
手向山ゝゝゝゝのちゝゝ
見ハいつゝにゝつゝ風の音○

月にしもすみの庭の更か西へり
定紋し御しと露のこゝす雪
こゝ梅の尾上ハ雪ハうかゝれて
ゐかりもあひつきうし几の了忽
桔梗の葛葉の入日影きこえて
いろゝさかなり露西かわきゝん
夕その言や殺の知れ雪の峯
ゐその西くゝはさめにゝ明ゆみん
雨とあゝゆきなりゆうの村行
まゝれ露のゝるさ又白き草れを
ふて露さけの岩れてさす田
ちゝさき秋しゝ木ハ多めく
夕せ乞もゝ文を行房の帰とお行て
ひけまゆ見てゝいゝのむさゝしの
雪ゝなる妻のゝ墨れぬへゝゝに
たゝしさゝり紫のこゝろあれ

鳥の跡をかへるのたれとそやって
氷ゆるくりすかまく河邊なれ
あしのかれかたにましはしき草
このころ夜ぬかわつてききえう
川邊や山の木かれてさえうん
池のほとりにゐて鷺鴨
岩ねの雪のたえまや霧降く
さゝ川 霜ハところくにきて跡か
客人こさうひゆくゆけのあと

芸さる句
ねハきゝねと入ぬの比
花季のあとに桜木の花ちかれ
さらさの中にまゐるね

小堂ゆかりさほすそしこささ虫く
はなくまとみつも人をうけひそ
まうるおもへにきゝるはかり菴
さかてうさを修すくさめん
候さ人お移し心ようわかひく

恋部
いろくに男のなすわや世のまし
いまけるさ中ふと恋のあさうくて
今さらんの人の心のいさるなれし
おりうけのとくかくらとてあしぬ
恋ひぬ独くしぬひるねうう
一筆とうしかと又ハこすかにて
うらわはら人をもうちもてやゝそ

かくてのちとうくる戸のなかし
さりとも少し月やうつりに結ぬけん
見しときけとうちくろとうしおと
さみつともすこし霞の月ますそこし
むらの名も月おとろへそろく
猶てすくさまんふるともやさ
臣をまうりのやさしとみも若月の人
ゆかさぬあてわまへわてわをわ
うたくとも君のむらの夢のいさうに
わとらんにもさよの花を衣の人て
夢をとましけとらかつと衣手
なろうすきをたなけの情もまてこ
又こうしひくをつるの一筆
はしまるきさにかけのとけての心しや
さくあつやすその跡わ恙帰縄
あつをうきわといつとえうちし

白うさに契れ来をかせきて
ちうとてもしのやおしよしまくの花
さえつをおりとこぬ人のたえ
まくほしわも結ゝつゝまれさ
あさ／＼何ともちきりをけつるん
うけをこうハするけとも兄え
うしを私よらつハ夢の夕きりしに
はるきなのさわわと化をよ
年つとるまれ／＼の一筆あり
昔をいはれおりけの中え
君のみちあへきゝをさひ出て
衣／＼の後も枕しわするゝて
人まとハきうま別の月
うらひとも／＼を名跡こうあれし
にハさわを白とわ仲のきくと郭の夢
あらうにうはる月のさひしさ

よるのむしくもあやしむなくなるに
うれしさのあまりよるハかわらぬ悦
かねてきゝしきとたてゝいひかはし
二人ハうつゝとねてもさめてもうれしさん
雪の夜のおもひをとらいくるかし
急しき松のおとゝそのうきこゑ
妻ゝうつゝしれぬおもひしめや
今ハ世のうきにはなれし添のき
ふたりもろともに人結て
みおもひもやまもりかはり
りんとるもにかゝこそ花の名すゝめ
さくらの枝をくるとまつさ
おもふわたしのうきてやいのこさえ
あつくもれーのさんしう
うらみごとそこのはきうしうきとまる
をひらけんてゝおやさしゝ中
をかさんいふきんあつさあやなや

うれしさをあいはとうてうまさて
ひくおなくをたて日やわつと
まつたゆるもねわさかかならに
あるかりもいのちをかけてわれ君
住しさの中ハいれらさんうし
あいちわるをのうらのしまさし
わもしまし中も今かく立つち
心をやるもいるいてかの中
ちらひてやうらつけのしもちさらん
ゝかねさけのま濡もあやしき
わさくまきのあれはやくさるらん
さすがしのさ一ともみのあれ
ねもおかれいらんそのもつさし
いもりにまきりけしあゝされぬ
いかにても日数かとよる我諸
袖こそつゆ馬よ車ーよ

かろきをとひ送りしみ関もなく
いつはりいはまし一とせの名を
はしきをはいはぬ人てやまさはまし
うしろへ我よの、その立まされ
あつみれはしかるのかおりけ
待人はまうき八乃りし衣
ひとわ妙をこのなりさけ着
あをくるはさうの人のとれきを
すくめかけるとも力をこわろつく
ゑりいてしれさう濡しさ
うらしりをとりてとく中やしつやをん
おとこつやられあはいけるのね
あくるよと思ふるゝりし出衣くよ
ひとわれゆりへ仏庵しや
世ひとりくさくともまし立して
うつくしく菊の花

ゐのをとしろみれすしをりしゆきそ
妙しみきつてかちらはれさほし
こくあかりぬく濡れやみきむしろ
なをさかられ宿こえし人し帽ぞれ
まつはさしえく名みれ秘のき
さつ宿ひさし一神なりよは
あつとふいとをみの旧き人さそわりて
さいわるゝさよもうさゝはしゆる
うるしすとちきろゆつれ身をさめそ
いちけるゝさあらもちきわけつゝ
おりふみ北上るしれ音しおろつうる
世に祇るん後れ世すんれ照りして
おかの玉しれ常れとふき
浜かしあ元すやともにわすわ河
あかれしいく田のいましくのあと
まりく辺こともまつしかのおもれさ

さよふくる月の床かうらさ川
あまのちきりはよるのしもしいろ
花さの竜はおもしろけれ衣すゝり
あらし暑れひとわけの床
身ほとのさころもおもやことよ
月ゆうことれつもやうさねん
哀たあさけとは三重唐衣
ほらそんしいさ早の中
三とせとするとちらしめすそ
こえいうまとけそおもしろ
われかんうきこさもうたに
くらのあきのころあしさ
玉篇のひまゝもなと思ととてうすて
三ヶ月ふりきにいみすもゝわ
人まりやともかとのいつゆせ
うしらこそいひせくやれみかめ

なきさしくさむよふく
あけほのをま空のよそこゝおち
あわれのうれしとともの風
あさくまさしれ雲とを中
はなりくろあつきをおもしろさ川
ぬのとももえて霧は心へつゝけ
さしみなとつきさき人と吹る
いろけなき猿とわ松ら人数つまそ
きなしは雪よあられきそろふ
人は花せととはよ心れし
給よわきけしまとろも菊花くゝ
みなろしにつろれのあつめの
まゝしろとうれしみかわまれて
えくこともふよりしと美とやき
見し長は蛇ろくれなきこ川
いるゝえきつゝとうすゝし

ことのさんに定むつきこそ便なれ
たゝましとある人毛ハ恨あれしや
おのがしきとさわりてよるわ
風たの恥るり哭あやしも
中さらめてとよのきのうた但をこそ
月をわかれしまうこさ袖
是よ我あふくや川れ名ちろくし
出ていまやのアハすて志り
むうひの車おとろそろく
まうこくの衣うつそい
おりまれあまりの秋よみまされ居て
さりなやのとさつ袖ハいさ
是一目みきわめすきみられて
かは乱んやまいくつうき
うしむまんあてるり筋よさ恨らり
風情あり おりつんやつらん

見ゆくほうきたにゆきうくる道
たつほらくを絶ぬきろれ経尽して
あきぬされぬとおりひれのゆめ
海より こつゝ落髪つまと
砌りもむりのすうさりの白さまも
まうらみをなうくすれの心おりて
衣のつりをけつそ川
三代まうそ陽ちよきて志り
さすらに解れ心まうしも
川とくめゆうさんことかくさき起よ
まちひつとふ寝や乃戸れうら
まけ来ひよあくぬさいわをつけって
くるつきみろをまうめしきのこ
おき添うさうそ文やうくさまし
くうしきちつうさむしろれ月
はし峰のいうしあすや去るらん

うつゝのころもなれな夢のうきよかし
かみきにうつゝのわれもあはれて
まよわそとゆめのよさりくるをとはぬきね
うとさへまくりよときうゝのやと
ともたゝへさと言ひやいをぬ
結ばれぬをゆふしくてうつゝかし
うひよりくるを暁りうてらく
笑をさくよりすかしうきうしろくたに
八ある身を何かうしむる
まなの月もわりをもわれくて
きうしうて甚名将そともろつましこ
おもてからの庭もれし忍

雑部

さみしくて耳をこよわれ
六十あまりをおもふを友となりしくて
鳥うひり君の人れけり
象れなけえ明ぬる維雨り
あるあかすてめてし名将を月をしれ
玉とかわなり荻の葉の露
山のし一つまたよりそこひしかり
たゝちわの親のうひれいはかわ
協まてもみうし玉名をおつた
代しりむるやまとことの人
多り師風もくやして茂総々
竹よわおくれたれむしの草
塵をたまへしさふ都清め
葉あり現ありするあすかれ
愚ありをすひしまにまとたきぬ

たのむ人をうらみ仙人
あしつをおりへて池藤の花
わかる人ともる御とみさく川
なすきお於りさくおく山をかさこすれ
まをあさりやまれるみ梅
たりとる浅きころくにつるかわれ
くしろきれあり雪のうく／＼
くあれとこ刃り雨の日あうさ
頭あのうらくにくる真はるゝ
霧の雫はしるれあくなわ
むもる苦りや萱ふきの多松く
らららしきめる西風はらし
哀まさまくつきてそハ志てまるすき
にくまする人にそさころなれ
やかり逝そもむかしえの中
是とのもくにあくなりはかね

湊路のこきとれ志らの世頃こうして
おかきすき契りみかりもしかこきれ
老は命やまもるれ氏神
佛よりとれとよろ川ともおりへ
すき人れ路をまちて八幡のえ
体むすにあてあり友を結つまて
わするを小舟をおりさ山まえ
あつことれこきわともするこ落涼て
をそわいてれさひのさくうき
いつくるらし小車の音
川をみ雪をとおよ頃こうして
くらく雨は峰のをとちかく
たちわたるとみきわれ池は海よ似て
菱ますわれらの音風の音
志川りなりるに入日れこす迎の字
まさ路らあこをのうら

もろこし唐人は西のはるく
三ももなききさらぎのことなりて
生まれしかどのこやらやこころは
あかさ明の上より佛はすおほに
七日くはいつめくわきん
めくらしてなをあきうしすあふぎて
なく逢人さとしにあけれたころも
枝ともろもろ花のあらはさ
泣ふは婦なり喜は友備り
世をはらひてれ人のさく
佛のこころをえたる信みして
はらの親もさとしにおりしを
幾のうらにあし乱路の事をつく
ひらわのこうらうさねのはり衣
耳なれはふかうみのてられん
露なりふかなとけさの深雪

松のふるゆやれ影の日はさして
玉の緒もいまハ中々絶はて
友すみもなき花の名そく
ゆかはなき空の姑はあれすわて
親のあとをしたふ法の令
志州をわたれや於ふ後の世
おもひて人目ぬこす墨染
のことそころの文はあやれし
君の後なるけさの中まさらひよ
妹ふかりわさ出よ分わ水の色
陽ハ谷川なり三をうかめ
あとしまてなれつみのあや
岩まりくなたよ佰ひの所かうこ
とらいにしも心へあり人をとふて
志あきねたう志ひのさうつさ
うしきにそうせしそやとし

見わたせはまつ人てらし出てらん
かたつらすまりみ雨ふりなりわきぬ
老たれるふしきにあみさのけ入すたること
こみちろうととこそあらわてころよ
新古今神楽のつとに旅と見て
なにとのしるさきりし世の新
よいおもしろうする濱の海士小舟
きこえくる嵐お茂みいとくわ
家を入つても松かりとも霧
何て濱のみちかりける入りねそく
とかくつきなれる末の旅のあとこそ
旅すわらも形つてこれ一つね
朝まつこさとも北車やわられて
露のうらみうらのうく
あけゆくも面のつきのさ所よ
わか行のうけ八千萬世よ宮いきあれ
て

きしのきこなる昔の書附
里をあまさえりすみの家く
藤子もりやさくのあとれ土らるらん
そこといろくの春のくわの
たとわつて山路こゆまへ月落て
あり山ひかりさしてり絶
夕立あふよあさ也土アをぬ添川
うきてくものこれ第の一本
大淀や池のうつれさまわ水
うきゆう神と宴ありえしう
うらけよえひのこ これをあふりて
なうきてたえいく此のうき草
かくろやゆふつてうつて旅に
あつさの羽やうてよおるゆる
旅あ为りいさわの一夜をききるう
よるとさとまれこつろうし

いろけなき行もしらぬ西やゆつまん
おろかにてめぐるこなたのさよを恨めや
えにしひとたびやまとちかひのん
ましのをもえよすゝや法の場
みのいのちをしみぬこの寺
ちしらわたる人の宗人
かこちかねあやうきありとい
里れるともなくすむ人やされ
いあれきしきしるき釈
ちかひのうちにたのもしみ中
佛ならやさしにうちあと住ん
けちかとおもふぬましわもかれ
神いふてあをもみわもはなれ
ただはかてふ玉のもりのいうあん
月のうへくゝ下るのつ
さしあんうはなれしあさなすら

はらしうて出はるさかるまゝ人り
うきくきしくいの瀬をうし法よ
ここりこてゝふあをいくも舟
日は暮乃やとわしきをなりき
兩さかふやみきしきと三悌の法
舎利まつはあかにまつやよ
みさるれよきひの塚はあなれみて
くこゑけなとなしそ拾ちる
樒もてかこなるわりやあるか人
さく火よちかきねやのさ八門
神いさうをこのなかとも句ふあかり
たまにいけるさとも降来て
うきやあれみれとれるかしらん
道ひらけ谷のこゝろえ
家のしこふとるやちさとうつらん
いとわかりきし寄をうるさく

うきふしとかくて御座さ
ありける日あつきのさかり
けりあつきはかはのをも暑さまよ
今のつきそれは流水の陰
まり西東はて楊柳のさむしろに
むらさいより袖は露の玉数
薄をそよきのりまね下紐
孤をたは扇のちらはさるゝきよ
けふからよそ生し人
四り二ろ三つまさんやは
よし亭も云ひへきこととたえて
すゞしき秋のかゝさとはたかる
うきかわれはうも墨衣めさすゝ、
三かへやくし中津しら波
下るて淵瀬の声へむつくよ
も宗なり薄かし枕を寄あそ

火桶や老は友となるらん
垣の垣うけて見つゝある猶
こゝろをいまはのさしもえふりさし
いはくなかれたれ秋の月
うつきをもさけれもしろう見まそ
行くるもうしこき人の衣は色
ちらまふよしもいみしくわ
うつさうまりれうる薄む
かそ日もと谷の下陰おろれ
とこえてうつるとの山陰
見るり中よ市の日今くら舟
浅のとへをおりふなとら
れさまりはうしろこそれ君か代よ
まことしもろうきとすきさ
よるさわしく忘れん枕すて
さすらへ浅くもいつこくれん

まつしこれ袈裟つけこまとこそあれ入り
谷のくまものとらかなれ
捨る身も実のうけをあつて代々り
わつ紀つや衣あきなく
うやはら海のもまみつりおらおそ
ゆきおきけ其の明おれ
寺ちつさ信家ハはれうとかくて
松風ありさびさびしめる独波
むかしをおもこうさきれ道
うきもにつく桜の一もと
山あひの雪や初めまりなる
雨笠のすつれれまきうるさなりちく
みきかふさわりうへれ袖
くる年ちまと代戸さしわや形
ちりひてや清の日桜を定ある
何陽なしまれりし何

塵のよは仏を釈とし座りれ
おもくハ坐さり風のうき霧
大井川入江の松の一もとあり
おろつかれつりはいえ久てや
いつりなんると生座いてくる
あるとまれ虚さひまわ
せき出くあすまても名をたのまあや
うきねきるあまわ袖ハえちぬる
あのあつしさしや温をえぬ
まつらん一とをいるくとと毎
今日こそハ祭ともきけ男山
きさちおうけてしらしあさけ
あるくハ又もうとく一ぬし
身まきへ名ある見おとろそ
うくれ影ん月うけるうけ
斉あしを清くねよなわれ仙さし

まいりさつきれきこしさとわつく
志ハしくなりをさそぬ出つけ
まきく人を送りても花の名のあきや
りかく人もすくあり連称りさき
紅葉をしらしなれ本ちりつく
舟のりくゆるの枝くれけ
冬の恋と云ふあらく人鶉うきて
門よりも風のしきしさ
龍のもせあふわしもうて雪おりて
よにあかさまてなハうひもすし
あつまとも花をしく主のするさめん
灯をともすつけや常なるん
すくくまあらあかれ家
雪ふりてよしれい夏の若さら
わ若ときさ川の江乃波
あみあさ水や神の霧すらし

夜の色ハゆうさりしらくなわ
舟こそよ今きすきよりし汁浪
日のおいるもこのねおろし吹あれて
冬くれ袖ちちこゆう小車そり
閑むく人さ人留いいろさく
嫁の海や波のうき巣よこうい出て
門口まつきりのしらし浪
たれとすしくあとをまうろ
恋て海苔もさめそや塩のおかゆかし
あさころしぬ身よふしてらん人もいさ
えるしさ人おとわの夜ハおとろきて
露文りおりひのまをこりく人
人こうむもく人下り江のつり
あるいの世の若さてらく人ハうし
走れ人とまたと云し友かすし
ゆくらくすて吾ハ我そつま作さ

うき世やはいとゞくるしきうつれし
あはれみとめおりけこめゆ詠かれし
あはれおさるのなけくあのえそ
たゞしさいふそはにきん
うきまけを定め去れ去れくよ
多く乃花よけるに、秋島の月
さしにすることを乃はつ乃名
糸まうことを勝つしいる所
はりさはむるしくるはつねり
くけきそひつれうハ見えさく
うきくみやするのさらひとめぬ人
きこしもあめこそくるのみち
磯らくうあれ流の名みそく
さしの月のなもやを依こしなりて
ひくさもたゞしきみのゆくほ
なんふつこ人しするの名人

くし徐りあはれ心のちさらいて
くみうさねるう砕のさうらさ
さひりをわするのへや道るらん
こけの氷をうちてきにの小
草わかれふも根さの緑よ絶
すきとすることをうけし徐のさ人
あすれのことをさあさ乱すの人
よろはつうさすれみうし風
あはを名をその隠徴やおもすらん
いつわりさし何もけるあと
まりめつさせとうきわ有涜り
むしろやそさくハ此事も掃おもて
こゝわもこゝにみつれさうるか
あやしきハ多かく人のまことまて
いそのうさをう寂るなるらん
なりけんるひく竹乃下風

ちる花はあらし山の花の色
あらしやきぬをまへし通路
こゝろをもつゐのくもぬきけりを川
なりにけり秋つゆしら萩
うきつけんよきてされ波の玉川よ
尾上よりおきさすかぜやうら
こゝろ海ハ波のひゞきの隔こえて
人きくふかさかゝる関路
波立ゑゝや波さそうにあふなれ
里さしへゆきし山乃かすみゆき
ゆきつれいつきハ雨ふりちりつゞきれ
ちをきこし夜れゆくてよいさまる道
まれさらくまれくよとれ門毎
たちとをそれしとらへ今もなし
くるやいりなこしまの波
なききてもすまの行みえさらも

人こゝろかりやなほまたこそあり衣
波よわきさらにうつる波りかね
まかりしたれしにかいつの年よりくらし
すさしさそこにつてゆく袖
山なることまて本よ駒をおりまて
ふることめて里りや雲れてゆらん
門色さてさら波の山かけ
るすらよの衣うらくうさぬる
おりふみれあまこ乃波よおもれみて
くれのひゝさしたよわるすゝすや
波のうらいりを秋れ名よしりて
めさ外て波のすこゝさてつき
またふしハまつね帰雁をとりて
こもみちやさしくりひを結なら
うきつきそてらさき帝れ日
まてはしらまつひの中霜

方便なり法の道をも去りそめて
笹をのこしてもふかく
多かひもこゝのありかなかなかすり衣
はとらむあへかたへを西や明あかし
くりてもふるのころとすひすそ
あさき人をおもひ出るよ松原く
ゆかりの縁ハたしくよみのこ
かなきころやな紙草相川
山しぬの後ハ草手紙中まて
しゝ衣ゆかりにあさく紀高すて
さすへてしも立ちるほと
いろさめ中乃後ハむしろ夜
日の後さすりさをめし家たまれ
まうに目もちう浪なすはのうつろひ
あさくひかれむこの山風
君のへかおつる瀧川

ふりをす莫とせしひの人なりて
のしお火れ縁やかなせれましきれ
まいらにあゆみる小夜のあしかさ
宿西人おりにきらふ月の西より
のの、きゑひもたしきこころ
さみすりゆへあれ古後乃たる
打く苑あれはかひさぬすた
あれくをなきての月の室の戸に
まうへをらきる秋の身人
うしとわの折りねかる住山
あらひかつへきよし辛るこ
蕾のなきさしに昔の人なりて
まうをゑりもう佐る世中
たてとてわきかハすく成し
絶の音れつくうけしきねかそて
枕のうれ而くれけさ流こ

来て見るは山あの山の水
柱く名付きしこ也しくの墻
秋さそういろ〳〵の花かたけつきて
くらきを雨ハかくさようけりなり
うちの草なり馬やハけ付と書て
しるれハ寒き明月の有と
灯の声で記所のさよ風なり
別人もすき庵の一もちら
来つ人まつにいもの宿ハ来るつまや
さ秋のさ夏のあやれさうき
門出こそおもうさ旅のくらしめす也
いつ山の雉しとおの関名なり
雨ハなくにあつくの名けり
友るもていろふ薪の袖おほこ
たましいさよとすて入山
なかばあらしてそうはヒ日なり

うしこきハ学ふる文の書くなり
あつさ行くもてぬうつねの他
たこうしも名おもしのまちやと
いろわのとこにけのおりや
明方と来しすり墨の香清く
よるをすつる山のれくもを向て
治うくとうさしうくるき
雪ハ足にけりつゝ上よおもちりて
来守来ありゆくさけるの道
く文のまさ墨付もさとくし
あらけこかうきとうらの中
うりめかしさみすたに皇ハすそうを
よこさ梅あおはいうにとろこ
山の雨しの吹あそうおと
こ松の松かりたつくた村なり
御名しあくさうよるのあるとも見ものて

むらしきゝしとなりし、ゆかさ
ときにゆかしさ求めゆかんや
身はさていつも思ひさみすらん
野への香ときくよりか乃羽浮そ
汝をりつもうつる身
こゝろ出しもみなも白露
秋をふく集りにける荻衣
消ゆよりきわりふる風
らくと樹にし山のうねの色
蛙のこゑや物々思は出けるらん
にしすひわのうちはちうや
身をいつもその花のみならん
友をられるさうおもしろまゝに
あはれくく人をまてをとへの奥
たひするやういすそれ心もし
思ひしれふもあすすてところそ

いまし一此歌を聞とる莫人に代り
いつくありともしらさらん草枕
こゝまさにもしらぬゆめの名のあるまし
三輪さらし聞をりしをくし山
天人此袖つるあとを三千とせに
人意をうしてもきて聞ゆるめ
まるはすきたる歌のいろなき
風そてあかりかさぬるの中一河
芦根なふあはれはこゝまさらる物すに
おこされくられまろひなくなわ
ましるひのたえ人をこ浮はわらやを
さみすると聞をおりつ秋の夕
かさなりけむまさと申此萬村り
凡ともみめる竹のたりみち
あはれや嵐のつきの葉もる色よ
営ゆめ立ぬゆふ庭よるれくて

秋のこゝろ乃あさけ去に行し
わくたる今くるさと
百敷の御濤とわつゝあつ波西へ
露あみゝくるは月人々ころも
すのうへ此舞のいりあやうゝるあはる
みとろうるみとやつこそハあるれすれ
さいふおもと色くたちてんころしく
入江の波うつすきをつかね
たゆくとあるのうけおハくわるをて
三けきの中此小あいろみと
三つ波のあさ浦を見かすなみの
くるしきハましるやうめ雲つゝく
いろけすゝのこ見とのをさりこ
あとえしのあよすてぬ世中
うかみのもれおしこそ命なれ
おさまりもりせハ時を言るあそらや

民のするくもすさ〳〵つるさ
きいするさわし心比おこなれ
くるすの寺うしろ此山のさる出て
あきしむろ紀り此後の母乃他
いつさの言あり信し男しうし
かけのるさけハさみすうなりの中
侘るのこゆかあみるすきゝら人ゝく
すしさやいつこりとゆ人里くるを
日ハ入りるのすゑのうゝ風
波のうこなりの苦此いくもつ
日のあれ西の姥ハせいを陸ぬ
百敷やたゝるる袖のいろくよ
あさうの中るをしらけてゆく
けさやすても哀と誌く〳〵草枕
うしハらきぬそことそうるしさ
遥よもるさとうる浜のこし此海

三月のころハれこそやよひの風
そらの里人ところしゆかしさ
九重の出入けさ小車にて
ほそえたれ水のさく
桃李のおりさハさくらしさしすゝ
うむらくらんハいさめそしるよ
乱逆りのつきハあやうきに
あさりはハそ迄とこそはゝまかわよ
えらひありもの声れ恨く
うわ霞のけふうら蔭ハ絶々わ
咲おりるあしけるむうけの出
いさ帰るしたれ来く
ひめをけるさへハもにふきさて
めくりくものすきましさ苑
いろとりのあしれ松のとしらす
あ形さるまさよ縄よひく舟

何公れ歌よいはりしまとけて
いさあれみなりしきしき月氣
樫つむあらわさ露たり袖あはれて
かくわくは年の色さわれよ向して
ますさし袖りしま代
ころせ川

弘治二年九月十日
於坂本晴元御興行

折の花さかりや誰か宿の春　梅
あらましき夢よりにはの緑より庭　晴元
出の日も夜空の月に松ゆて　言
野さはらの道も秋や更ぬらむ　西月
松の風枝の上の露涼しけり　宗難
見ゆる伝の鳥ぞかへるなる谷　友孝
むかしはたゞつる道の末まで　治也
谷の戸の氷もすけりふとけ　泰識
河音に聞くも雪やとけぬらん　吾三
けさまでは今朝はわが家の色　孝
ふるすものよそは春の霜も枕　之信
幾さとも人のさかえ隠　長親
玉垂の道も絶えず霜　元知
柳うちなびく月になるらむ　之加

風あるハ秋の蟲見え新涼て　仍景
明りせらしもうつゝの夜の声　梅
なすび売やる後の月とてうつし筆小冊　之
談ずるものゝとゝまりてする能ニ　言
香露の草よみおさにうねなみて　日
いろのさたりし大桜のむらさき立　青
うつ渡のかなわ苔清の末ハ友花上　孝
声つく立夕すれまゝ雨の夜　巴
暑の扇よ秋風もゝ何ゆく　識
うれしき弁の子うかうて月　三
四季もとつろそ秋り水のうけまた　光
袖すきあり舟ほの宿の名　信
これもこの立ち集ハ家内主めて　執
結やさひしくあししゝ昨日　之
田へ入れ物を憂すうしの松の風に　梅
あさきりの上女を松ほとゝん　月

はき入るとすゝ秋の清見え　言
ゑみの音しきよりの寂清　孝
初しくすあらぬゆめてあをすたに　青
雨しつかなれ山のとれの山　初
うつくしも落でよまゝる雪の露路ニ　巴
またもゆうつきてなれるとろさ　か
下水のをとも氷とやらく　之
田つらの嵯ろもあきしゆ　言
里はてたものすそしあらんや　月
しけみつるとハもち坐ル来　識
霰ふりて月よりかも雨る百日ゑて　執
いそぐひすりの袖のちうすまく　麦
うろのハさえりくの花桃晴て　巴
わすれむとすれハ人の虫しさ　梅
結ぶとく形もつくされます　信
利しと袖の面のけのこれ　鬼

夜のまてらゆけはまの遠山に　孝
くれのくせらのとやうりに　之
昔よめ夢ばかりのさゝらめてきこえ　吉
七囲まとのこすかすにわか庵　梅
三 これのえんうきに無事をきてん　之
すゝろえまゝとぬ人のきのあさ　巴
井向すきゝかたゝりかたにくつきく　吉
つゝきをゆつもうえ後暖しいつけ　言
うつすの八袖のまとゝとりてみすぬ　三
秋風さらえ上高話の萩から　言
あれぬ恩とつまの庵の御寄に　信
宿人あかるき月のさやうき　梅
何ろ人花越もりすき所の主　月
ほのしきれらつつきかゝの声　識
一かりま春のかゝ笛比喜木の里　言
いさうそれにー契ありれつ　巴

うまめてよみの夏をとまはこえ　之
二道かまゝろすのむさらのあさ　梅
きゝろくゝしたにめ限るの山庵に　言
むまのつられ八子かくゑ一白声　吉
こゝや話の末や杖くぬまのすむえん　む
井出るまのほゝみゝみちゃめし　和
関もこの更多人のうの上江八晴るく　梅
ますゝく人ありし比枯ゆあらこの作　月
神さらゝく三輪の竹原八ゐる墨書　巴
あゝしをきをとゝつて灯し　孝
こゝわもえこゝのかみ比紫の庵　識
すてゝまめ折ハさまあるゝ多見　三
道すゝに里の之へゐる　わの命　吉
つまされさも松谷よまてのよみ和　梅
杉のさゝし多つて秋のやゝしくさく　言
上ゐる字とゝゐ月もの乞うね　之

秋虫の声もかれハ浦ヶ磯　之
山の二ツ井はしみせ風すく　巴
みられハ一本のころむら鶯　信
つきくみうきし雪のなきえ　言
霜かまらもやう新の粉なて　梅
さらぬハやつれも色人の袖　旨
すきよしかハ里中の方さ故に　之
見るるうつりしこのよの月　巴
こそも花あつねきのしれ御見れ　孝
春よれよし寺寺のまうみ　旨
これハ名をよくもの波播　れ
舟うものゆきてそあらく夕波　識
山よきんいくのとのしみつん　む
都もしこかさむくなかり　梅
立出らその戻すり春の上　旨
あらうあしまの袖みなきを　月

これの身はる一指よりかゝ露まて　梅
笠すてあつめたる身のやすらひ　言
よろしくと前の上のこりとる　之
入らさすらに雨かゝくなか　孝
これ求の木かけて白きく露落て　巴
置くるりはゆくさの行けり　信

迎雨処
梅　十二句　富蒼（鋼岩戸大様）十一　吾三（鯛元）
晴元　十　蔵孝　七　不む（円）
聖つ
言　十句　信巴　十　元信（円）（聖つ元）
蜀月　七　恭蔵（東元）六　也れ
之知（鯛元）
之加（円）
仍葉　一

ある人の追善に

何色

これくさへはなれしあとの法の声哉　紹巴
くもりはしもあえぬなみだの夕霧　良政
池の水すくなきしもの上毛の月寒て　蔵孝
岩まの水もよるかけ山の梯　昌叱
あらしふく宿も更しはかりの枕　心前
ゆめさますこゑやこそたつねまし　巴
まれにこそあやこゑのしるへのまほしるへ　政
秋のしくれの晴やらぬかな　孝
ウ たちつくま木にかに更の雲のひと　叱
追ちかきをしのわかぬすみやま　前
人めなき田中の養も月の前　政
産月まかなる風の音信　巴
涼しさはちり行計のみに　前
雨すこし降立出る也　叱

なかんきし初稿まいりきつきれ　孝
ちきらぬ年のこゑあはれしも　巴
世の中も道をひきわけ廻めて　政
うちのまくまかぬ人　孝
まけてうまし恨の命も乱れぬ　巴
醉ふすみおくくも恨つきまつき　前
手あらの花を水せきれの春にきて　叱
二 霞あかのうつて山川の末　政
よのすりの方や氷汁ぬかぬるん　孝
竹のさきれのしもさゆやく音　叱
よあくしまあかわりつて胡朋　前
衣をとつきよいま稿人　巴
出なれまく楽よの月聲なりて　政
いる聖聲をとすつの便よ　孝
刈あともはいくさきの三萩原　叱
露の上おやつて秋のこえり　前

夜の見たてのかくしまきかな山
うすき衣きらかへる海
撥音もことに更て舞すくなくして
さすよその日は今日なしたる
よろは置たえ夕にたつ御供て
あめのかゝめきくしての歩もなし
出し見えもぬるを取つるきん
うきみかかうらも行てのむ中
まり道てらむのすへに
こえさわすゝしきけふの陽
三重てのやの市みさやして秋暮
いろくすかれ家のうきこ
むしの見ほのすめつの夢かな
あ露み雲つるてけ
月もれすあらのさ返に
さしかはかれつて国の戸

巴 孜 お 巴 孝 叱 孝 巴 お 叱 孜 孝 巴 お 叱

あらましともすりやこしすらん
さらくの枝ちえすうひすふかく
夜雲も霞の月見雲の頂て
すの袖をしもこ探の山
越らしよにく夕ほのけさし降ある
立これよの途中ぬまゆ
古のこころしらて寝覚て
うき無事に仮しやしさ
猶身をきすし絶えすまて喜れ
あともさらぬ水の江の波
五月雨は旅の子草こゝ枝て
殉倒捨ら落花のさと
さみ行し山やとこ刈谷姫ん
あらしより谷の戸に雲
秋のよの雲は揺す月雲て
扇さしつし垂し 巳把

孜 孝 巴 お 叱 孜 孝 巴 叱 お 巴 孝 孜 お 叱 巴

名をしめしゆかしがりすゝめつゝやかこゝ迄
お道つのなすやあきらめぬ文
古き哉のこ人も宇治の留守
さつしられいこやことてもいさ
うえて夜のまへこゝまで桂枝屋
もろや出家の身すてつ道
奢りつゝ足りてしひりす氷底て
よしくれやりや川上の雲
いまだつかぬに見えけれ舟軒
待ほどもさらさらこゝすの有明月
ちぎりの誓言をあてらむ袖の裏
なきもてとらのあさかへの花
山姫の眉は柳のみだれ髪
まづ去りとしての霰り雪
秋来ればそよ立ちていかる鳴
当代古田のけむりのかたき末

孝　致　巴　叱　お　孝　致　巴　叱　お　孝　致　巴　孝　お　叱

名
舟つなぐ岸の九度と頭く
いかなる君の影も面ちつきいる
山松の沈て寒さて白も吾り
夜もさゆるの寒さや三吉野
もろとも家を出る人の別
こゝ方まさやつ二道の末
あれ君の手を執らさんゆき石
すれ違ふいの黒やまさりな
利まで和泉しての定やあらむ影かれ
月と西のあの月の空
漢詩の春秋見千鳥北帆にて
冷しくなまる沖は塩の秘
こく舟のよしめもあし寸悟るに
ゑみめよこもる遊の枝すゝ
海ゆのうつつのめ見ゆる行て
よ松の椒子の山吹ちの末

致　巴　叱　お　巴　孝　お　致　孝　巴　致　叱　孝　お　叱　巴

神垣や立出る袖のゆかりハたゝ　玄
うつゝを聞さへすゝきを出しぬ　政
おもかれる代もこそ君のふかきて　巴
かすみうつゝにて隔ゆく　叱
こゝろこそ我身の名もれも浮世　孝
うすくなるのこゝもしらすこそあれ　ころ知ら

天正九年三月十一日

何人

霧はてゝ雨雲の秋の夜ハてのれ　紹巴
空しもすく花やしらぬ雲　藤孝
浦波もきこゆ入舟の声嘆く　昌叱
雨晴やかな末の杉ちるさ　心前
咲つゝぬあらしや雪にさそふらん　文閑
ますらをよせハ袖の手かけさ　宗及
舟のうたうつる袖のもと数嶋　玄安
荊田比西の夢にみたらく　則盛

ウ
秋の霧にむすひ結ぬるに清うちも　京韵
羽をとる老翁をもつかにて　巴
舟とゝすゝむ清の水上の　孝
浮しさきのたつ影の夕の夜　叱
声のこゑや浪のたえにし鹿なき　前
宮やハ塩のひまにあらハし　閑
霧をも拂ひ計の雨ふりき　及
さつまきの雲をかくり袖　安
まろきてかめ里の枕を起かく　盛
月にえちる影いゆるみる　前
山本の声ハ誰やく宇のみ　巴
なれにし三輪川の波　孝
風や松つ夕の色をはふきまん　叱
いとゝの軒比入星やふし　韵
半天のこよひのつゆのめて　閑
まうつ物かくはもゆ夢吹火　及

砧の声も更ゆく里ハ寂しき　安
あつきに起ぬうつゝの袖　益
きこゆるもえおる衣しみかくゆやさ　巻
ものくるひけりかくちあやしも　巴
みほすゝまもはのはそゝの襟つん　荷
亀つみて井の見つゝすゝまゝ見ゆ　比
夏ハ栢牙の花ちるくをゝ宿　粉
我ゝめかつむかゝ消芽かの月　閑
秋風に光くの行の秋此名　友
椛のさとさし夜すりきと　巻
たゝかこし里ハうらの暦くの末　巴
ひとつ垣内の梅ゆかりつゝん　比

二ウ

雪はけて消ぬるゝのに降て　益
吾のハかん名のうらみ守　荷
あさのめし妻の限の左かの香　巻
三わらきんくまとつゝうらの紫　巴
よくよすゝね親をもあやあつきて　比
あうられ流膳を写給のお　友
のしもゝをそ手折ひやぬすん　粉
さりしのみけり古寺の　閑
椛の気れ端行つゝあとくさゝく　巴
みつきゆくゆ海ゆ寒く　巻
をと見れぬゆ女候つて夜し舟　安
月夜のまゝやまうの川上　比
一むらハ柳に花に揮まゝく　荷

三

浅尿かゝ小白の苗代　巴
雨やこの後見に露にありん　閑
猿飴ゆゝれこそゆ鬼のよ　益
草くもゆきかめきつゝの風立く　巻
かこみもかすゝく古池の秋　荷
もつすりに柳や春ハ鈍きのうらん　巴
月ゆくうつまて　大へそねん　友

吉野もはるゝ夜の下紐
いもがほのとけ床几ゆくら
さゝやけれつゝなす三日まで神祭
ゆふ暮のつまでゑゆ如き風
遠山も雨後晴ゆく雲の上
関守人の声のあはれを啼く雁
すゞむ夜の月にあはれ啼く鹿
色おしき朝の初雪
三ウ それとしもあへぬ心に花の露
秋の雲の花もの行
水さびし花や蓼柳も散すゝき
ふくすよ風のうき草
おろし釣網の端しもとき江
いつ町とさくさとて道
なき日も月より晴る国なし
文の字みさゝしまるつき

叱 杉 ホ 巴 友 孝 安 叱 杉 益 巴 ホ 巴 孝 友 闲

さよのよみむまれの独寝して
つまきと雪の道すがら
床しらく戸さしみ若あれ草
すむ人いつまで拝む蛍
夢路ふうちうつすしも夜
名 このまゝつゝおもわや田居
跡の苗しつらえまつの山も作
桜つゝやこの枕せん
永くもやおちてるゝすて
つゞの名それるの碑の道
旅人の肩の杖に花を
友まだみや立つゝ袖
雲のしも天も山影まで
梅の匂に咲ぬ雲の架
国のうみ松まくり風の声
月よちかよ陰のもなき

益 巴 ホ 叱 孝 安 闲 友 益 ホ 孝 叱 巴 安 杉 益

流れゆく池の氷のけふやとけ　丈
つらねきし比翼の鳥とを　孝
子守鴨の翅の乱れにそむく身　右
あらし思ふのうらの道のり　円
影みの庵比軒のすたれ見えて　也
こゝろ消ぬは雲と共に　丈
花ちるは見よいまも出　孝
うすゞもさえて枝の露　右
見ぬむかしの人衆のこゝろ　七
こけ衣の袂比ぬれ手にもとる　円
寝しのしこ袖の色　安
もしもれつゝ袖のゆく　金阿

紹巴 十四　宗及 十一　叔孝 十四
昌叱 十三　則益 九　心前 十三
文閑 十　金阿 一　宗安 八
玄朝 七

天正十年二月五日
何船

なれはえてちんりは梅花のわか花
柳風吹園の若草
雨晴て垣の水は手にも問けて
入日うけはみえさきの春のこゝ
まへゆく月まつ人まさき道なりん
霞立こゑ山あらし北袖
鳴かぬ日暮の声み遠つゝらく
冬はわれわかは小田のうちちる
川ふちの松に舟やはたちえん
置く露をつゝむ衣手のこほる
ほのかなる燗の市に乱れけて
山みちのえれも物まさうつけ
旅をなと述まされれわかきの花も
嵐すの風やさそはしつめ苗に

紹巴
叔孝
昌叱
昌叱
文閑
永孝
了任
津勝
永種
心前
宗及
右院
則益

こゝかしこ方々花あり杉の露　孝
人のなさけハ今宵の月　巴
誰ゆへにおきつかつきの袖に露　叱
手折ふさしめくく中にあやしさ　早
あさましの我すかた(?)かくて身を　弁
旅まくらすゝむるものき仕国　中
哀此のさひしき旅を思ひやり　任
ちらちらと扉のかけて行ゆけ　永
雪やまたまたこゝに収てもしるし　徒
あはれさに旅人の袖　藩
ここかしこ舟ハなかれみつのみて　及
花のさかりに流こゆるを　鑑
白魚や川上わたし咲ぬらん　孝
雪もまたけふのけ涼し　収
山深く来るの下蔭ゆきあて　巴
秋もまた庵子の露とつけぬ也　叱
秋の野にあらし田の面に露なるを　早
草の庵此月のさひしさ　弁
身をつかハ往の扉の月もありて　中
袖の氷ハつゝけてま　任
ものおもふころや春もさゝきん　永
おもひあしてうつる永し　孝
賞ハ花みつる文の書くて　世
よしとしてかみつ世の師　徒
君慈もみをつて世を捨て　藩
ましるの中の事ととまらん　及
我床も砕み道をみかへし　弁
いそく門より花おほみのかは　中
帰るおほしのかの人の事よ　叱
涼しきほとを月すらなん　悦
悲しきにかほの影のつらん　巴
よよとみて虫の声の哀さ　任

三

風ハ花垣の野々人々立添て　盤
くるしよりけくおろすこんの声　早
りうすてところは楼のも乳か隠　示孝
春の香り扇の山の雪　孝
去つらむ哉霞のうこれ汲の音　程
田中をとく網をかりわうちて　巴
柳ハむかしのめむかしのさうのひまく　中
のかわされハかうさうさく山　吹
谷あひの道すい遊びて梅花咲　及
云ら立よ秋風のこれ　卉
旅立のつゝさ師も兄ね大津　早
物のうつり見え此軒ところわり　勝
降やまね雨も古の里そして　任
うつつ年菊の花のつくむら　盤
星のつやまつの末此よのかりうし　孝
なに山下風のるうまとい　示

三ウ

藤の宮ハ霞こそなほ汲くし　吹
桃ハよもいふ々しゆれまし　及
ら花うちてをとこうおさらよ衣　巴
かすてゝてつゝやおやすうの晝　中
ちすみなく秋をとさうしのま～　勝
うらの道やよしくのこと草此露　程
きこ高祭の風もうき取色え　孝
みからあつさや松の下み此月　吹
晩之まちのうしく月こそむつのひ　早
余花のわう遠そせよつのさらすさ　巴
道寿なる世のいふせきるまほ　盤
あまりせし世しの一筆の絵　任
形見の布と雨あかつ草子まそて　卉
むつしもしの名もう和すれ　程
つきにまゆよつなひつゝ花の枝　吹
神のつすこもあつかうの友　示

まこ天より落つるなけれこそ珠　巴
あつさにやましき昔の夢もなし露　揚
ますらをの弓はき秋つる陣の　悦
これハ出る鼻の浦の舟　孝
浦風も絶えく涙つゆもかく　住
煙すゝけるれの声ひたりけし　叱
ちかくすむわか男ちか友　中
揺みなす寄つゆるきつうし　及
みなまうちつるなつもやねかた雲　斉
若衆つてひとさへとをなけ　巴
まつほとしもとそこちれやほと寄　永
あさくそれも国のあけぼの　早
月やや山のこそつりつまむ　種
剪のつゆらめ絶えきりね　蟹
咲落る本末の林に風めとさ　巴
あめしきやの比ほとかかはめ　住

ちかくなつちるまゝ流の底　叱
あやすきはくて岩のけに記　程
菖蒲やみの入雨やまりやまきえ　蟹
まつ雨ぬまのうき　ら雲　及
下野の月と君とくあはもて　孝
うつきうしらね春のかすれ　中

紹巴 十一　永孝 七　石悦 文
友孝 九　可住 八　友益 一
日中調 七　清勝 六
昌叱 十　永種 八
為拍 八　正蟹 七
丈大 七　宗及 六

天正十三年五月廿七日

何船

遥〻とつゝきは藤の末もなし　紹巴

わけ入夏山の露ふかみさ　玄仍

白雨の空はうたゝ谷越て　白

こゑくすゝしき中天の月　玄旨

秋風や水上すゝしき道のへん　秋

ゆふ塚のつゝく柳ちりてきよ　昌叱

玉章の袖しめやかにつゝ香にほふ　心前

幾とせとなりゆくの夢あひかつゝむ　文閑

一夜ハ二たりあともしらぬこれ　兼恃

夕霧さやかにしきの色み匂　盛

人帰る葉の里より隔て　玄何

舟ほのかにしる江の月　世

隠沼くふかくも月影　以

梅ヶ香ゝくそのすゝし　白

捨さる月をまつ人友の身を送て　旨

のこる名はしらすもわすれて　秋

かゝつゝまくこゝろきぬきゝ人恨みて　叱

雪のつとよと秋もくの月　前

野らかめくあしハ花数声すて　閑

梢の色もやうやうしれつゝけ　恃

こえよ万葉色くりやなゝの雪　盛

跳の影もしれむすゝみ　以

井泉辺手す布留の里すれ　世

雨けるつゝわすれあけゝぬめくえ　旨

一声の情もよそつてほとゝきす　白

月閉さうさるるこし岸の戸　叱

夕帰るは訪をとえて人告て　秋

夢の現ハちるまゝのうちすし　閑

幸みゝくしむすきし人のゆく花　前

わすれむしその袖みゝつる　盛

伊八これしもかゝる菊の秋　以
山端の月をこのみころせし　帖
さひしさのつまみ散しに雨あかし　此
風すさましき高砂の波　白
松しまる舟のつな結ひ捨に消く　吉
夕のかねつきすむさと　巴
吉亭すやきつゝきて春の雨の中　周
ゟもつゝさき澤のまて　秋
宵ゐちきせも人よゐの戻りて　帖
透へて住もいのり蓮生　古
みさ枯ぬ庭の松生居に住し　巴
と朝よめ露の花見の人の岩　此
捨ちて薪ハ葦を茎のそて　白
ゑしかきむりやゆうつゝ舞　吉
さしのかゝ新良にてさく秋の月　蟹
ぢちそひかゝし麻のさ衣　以

こゝや花鞭まけつけてらら帰られ　お
またも深谷の雪花のけさ　巴
たれすゑ風や嵐の中倉山　此
名残てはての露こまて　采
まつをさよゐ楫露への立出て　与
雲のま袖やいさよふるゝむ　お
うつひりゆぬ夜ゐゑむ池の波　以
蓬けしますはの露やの霜　此
侘も捨なすゝ恨と分らし　巴
浅きまよゐしれのけきされしよ　白
よのむなもうき人計の情まて　秋
よわ一夜なく男をわかれん　帖
月の露さらゝよしも深き草枕　采
秋とれ桜のうきさ恨あれ　吉
古ゐのさうかゝすんむ大はて　お
新人あゝぬかすまゝ川の声　蟹

散てもさそや桜のさくらあらん　白
年ハ根くし治の香をけし　以
陸つゝや墨色の内に雪の冬　此
霞の裾の廓に鳴ひ　巴
此方を明くし怖ら知らる帰て　秋
扉にちゝろく庭の出水　旨
松風や御つる異きさらつらん　蟹
秋はまうしつ出る雨の宿　お
四の秋もしゝもあそ人月の谷　白
顔さらの人の稲かすこつらん　采
いさけなく初秋も花はつのゝ　以
つるのよ頼ゝハゝのうすれく　怙
親も忘みのうそかね和尚が見　巴
すけまく絶す吹なの風　秋
山くのうれしき梅の水すそ　お
蕪猫うつる道ゝぬのすゝめらん　此

世まとぬし佛を思ふに閑居　閑
あやしきいつ何よりつ揺　巴
帽子あつまて庭もやらまゝん　秋
あしやうわすれ秋の坂此声　白
うやとみの月砂御ら軒の雨　此
隠くる乳ゝしゝく桐の露　お
こゝあそ石と石の有様　旨
古く落をうらしく哀なき　以
明るくいつつ鶴すよつり　怙
春すの神の誓とし去ね　此
彭しもあらて西岸き法の色　巴
くの藤扱くてさんもやとし　蟹
志のたつてあつ乱ゝみ宿傍こ　旨
枕せなハて見ゆらる比人　白
命ならゝ今日のまくを出雲て　秋
我もすてさすし世の中の露　怙

後行もあすへて残る里の春　お
里ちかくすれあすみ陰の山畑　巴
見えぬ人あなまた枚原の花ちるも　心
うちわたすつゝ 杉みる雨の色　旨
静かなるものゝすゑの家の線の蜒　白
見えるこのきるも夜の白露さ　叱

紹巴 十二　心前 十一　玄仍 十
文閑 八　白 十句　其阿 八
玄旨 十一　西盤 七　秋 九句
玄仍 一　昌叱 十二

天正十五 三月晦日
於聖護院殿

於しむなよ又句ふ花の春　紹巴
夕のこる花ふかき遠山　白
も雨なすら波のりゆくを舟見て　玄仍
うちつくまて比月の友なれ　盛
出のまゝさくらさく[illegible]　昌叱
野まかひ孫の節つゝ　日斗
朝霧の雲また雨やみつる　心前
袖ほしの[illegible]ふれの道　玄旨
あのすし[illegible]係もえ　文閑
ひとしめく水の　出家嘉
曽人やしめかしこ[illegible]　雅継朝臣
雪ふるの[illegible]　友益
織るも風の[illegible]　宗句
聞越やつすね[illegible]　玄仍

了そこしちハいつりと云像
あきれたるて文の多み葉
つきかぬる恨の独りはてこの
おくるよまつ涸さしろむ
ついつもすましきなて親に
きますあしなすよふにかゝ
月ま入今秋のひさゝ計まで
二 秋風の声しこしくの声
ツ この夜半つきに体も似しつ
うきよさらぬかはかぬくこひ
松くのみ葉の陰ハあるし
さたりしるその松の末こき
アのれも峰ある続く道絶て
あなまから人亦し立つひまく
利て八文つゝあまりけるん
八 居帰てもりたらぬ本哉

白 也 落 以 日 此 旨 高 学 果 並 続 也 句 以 白

峯の色うすき霧まあらはれて
松のみつめさうさくいふ
波やてあのまてくいてさる
風もあしこゝてのつゝ
夕日れ月をいそしとなさりて
ア ぬれて秋やむかしの露
か出る道の蘇なる陰に
いちすつをうる立しあと
虔くのさうちし行手の落て
まことよおもしにあまりとまり
松よりあるよしまそかれた
一すちゝの仏しよする
るぬるよりまきるてるの庵
てこの峯の道あるけりし
神室ハつりちよめなかけて
としの赤此葉の宿

此 旨 高 日 也 果 以 白 並 旨 学 句 以 也 高

さよ風に松浦のかけ秋の月
冴ますそ行人のつれ〳〵に
ハみをつくしやの露に迷ふもみちて
落花も都し昔の梅か香
うつろひすみ初つゝ山吹の軒近き
菖蒲や名に春をよそなれ
雨そゝのそゝきし夕立頃て
思ふのなきれ声のすゝすめ
ふる道の池の堤に蓮かもって
枯れ草の根さしうつる
人はよまつの陽に詠すけり
アこゝへあそこにとるとも火
月まてあやしやこの国の円
あかぬ人さへ露にまよふて
ぬれ道こをきさまも君の枕して
秘やこをし落る涙ふる

徒　為　比　日　於　旨　以　白　呂　巴　益　匂　比　斗　旨　於

洞ふるて一つき径も池のそぬ
ふすねの床もあまきしきれ
如八松の声に露の浅つつるの人
垣ふつまきてこの気はる
五月雨の晴まはす衣の名残をそ
降りて音ありて川あらき花音
みなくも船の中舟ハ浦漕ゆり
ハオハソのすくろさきゆめきき
九重の月ハさえわたるを見をそ
独波比さとの秋花あされさ
雲の清花たるとそふきす伊勢
路もおのそれよいのまいらは
おのむもいつも花の中まそ
思いきもなおり詠む
ハ住のむさ人ハよみさきのもと
とも先りきのまうの手もかな

白　徒　巴　比　益　旨　徒　以　於　白　為　呂　日　巴　以　匂

関すしるねぬ[illegible]すまる[illegible]　旨
起[illegible]の雪[illegible]山[illegible]　お
言[illegible]あし[illegible]も[illegible]　叱
まつ[illegible]ほ[illegible]の月　蓋
ちよ[illegible]む[illegible]の秋[illegible]　来
竹[illegible]　白
石も[illegible]　巴
こ[illegible]井の水　以
一夜のす[illegible]やすく[illegible]　鳥
志[illegible]　日
潤[illegible]の[illegible]　旬
之[illegible]も[illegible]ほと　叱
け[illegible]に[illegible]　素
り[illegible]の山の[illegible]　巴
雨しつ[illegible]あし[illegible]の[illegible]　旨
白浪[illegible]　来

う[illegible]柳[illegible]の[illegible]　白
永[illegible]つ[illegible]まり[illegible]　鳥
う[illegible]の[illegible]　お
之[illegible]も[illegible]の[illegible]あや　抱
あ[illegible]しつ[illegible]の枝　以
山[illegible]の霧や[illegible]　日

紀巴 十	素旨 九	白 九夕
文同 七	素丸 九	時嵐 九
鳥中 七	雅継 六	鳥叱 九
友蓋 六	日中 七	宗旬 六
山お 九	素何 一	

天正十六年三月十一日

玉何

治れる世の声としるし百千鳥
弁の学ひも花も影も栄き
宮此松梅も初花ゆけるけふそかし
ちかひの軒の雪にとまる袖
吹出るあらしや雪を残すらん
やかてほのかなる月の山のま
小男鹿の鳴く声を秋のしらへに
露の置その夜すから霧のかけて
草の葉にうつる影や離やつれぬ
ゆくすゑも遥の道
橋よりも侍社の体も見え
涼しさを寸弁れもなく
夕立の雨や雲のあらし森
こゝろさへ月のまくらに雪

秀吉
松
昌叱
白
秋
紹巴
敦佳
家
友
玄
全宗
由己
一千代
旨

天乙女琴笛の声継しし人
うつし絵見にも灯のかけ
うちとけて碑の眠る跡とゝまりて
ともなふ人も月にかよふる
しるし寸れ当りすれ秋の戸に
鈴虫いなく遥の声たえて
山のはも秋の夜ふかくすまれ
袖をしほりてはし山つたひ
たつぬれや見るり露こそ
まつこゝろもきえつゝすむ
のちの世の...
こゝろのつきもすむはさきれ
ゆるやすき神もひやすの月出て
あかりたくてきさり此たひ
雪や花水のひまに森
まつこゝろつきあまのつみ

松 叱 白 秋 巴 円 お 成 以 す 巴 松 旨 白 叱 巴

かすみ信夫やのほとわ若菜見て
ア
橘家ふりすめく山の見のふもとし
こゝろくも秋のそうきぬやのうつる森
見えもしたりこやさえもしこゝろ
さやの花山月の光八雪さ咲て
ちるや春の信はくく浮
ウ
り(?)のうち里みつのきよの夜のしこ
やきにわこゝろやちるもつのみ森
山桐のさうなさ浮の浮かく
ハ
嵐ちまし萩のやけなる
ゆはしくも嵯峨のさゝれ林くし
そうきそこまてのわ春雨の宅
屋のうち月秋鄉てわの森
雪そいふかく桜のりすはお
名月もし宋三夕も手の了の枕
いつこのすゑぬ松風のやま

秋　お　仙　國　松　一　巳　守　巳　旨　一　は　お　松　白　比

三
峰のさし八十松はまゝまつ
うつり見の桂たし竹影も
いつもの色知りなやつさん
さゆくうゆくも旦まけの宅
こむもなのれの青み
桂いつもみまり垣のも年浮
わすらせしもつさく江の舟
こゝ東風まぬりせるのゆやまん
みぞし思ものすれくまる柳
窓もまたふいより帰りて
けふあつそれふ雪の苔九底
思ふむしさうしき道ハ大宮れぬ
もろ入つして秋の水に
俺ゆすみ里やおちつ梅花影え
みかつとそうの夕あつれる軸

巳　松　國　比　守　巳　一　は　松　巳　お　國　白　旨　秋

ハ 虫ハて露結てたのみの何出さく
かしらの九ちの月のさやけさ
ウ うすもとも千きおもと立すれ
コ したのつかのうし かくも
稲かれハすみやつ田の庵つゆ
しみ人ますれのかすれかな 宝
哀をかしもくもうき 新枕
あきまくちらしもともりの袖
あすまもみちの梅ハわかうすて
庵かしうられそ家ハうき乱つ
入うさん軒やねくるの村すて鬼
住あしいかし古寺みすも
花や打くるみやのこにつかさん
すとまくのほとなし かす
ハ 夏の田のつま前まつ秋や萩の下
おんくるまへし 夏のきの室

杉 比 守 也 お 國 秋 旨 ⺀ 也 比 杉 也 佳 白 秋

名 中車のりつつ愛むれ年まくり
つつ子をすれのさ結の花を
わつみつやいさなされりあきん
ほとくすみのつ袖のかく
ふかくて ゆをひらつ大丘隆
とちつくハみすつ五のきと
みつやそらの名比あるれ
柏のわくろ里のさくうろ
うあつ光のいかあまた指え
うむきらの世比ていおやす
延しあんやいえひくせ根やさ
つきるおれに胸の花しさ
ア うまけつ月やいさん 哀 歎
ともむとや夜しの花
まつとはく露の行るにいなきて
神のすしきハ秋のみ居

國 旨 巳 守 杉 ⺀ 比 也 お 白 旨 秋 佳 也 守 杉

りくも嵐ふきたつ峰の声　白

遠つあらぬ水の一すち　お

さし枝の雪まつ花をみて　旨

寒さも残し春の神秋　叱

明かねたるこそうらなき初嵐　秋

法の神も祈し　以

玄旨　九　執筆　七

松　十句　久家　八

昌叱　九　友盛　七

白　八句　玄仍　八

秋　九句　全　七

紹巴　九　由己　七

一　余代　一

慶長二　八月八日

何路

国入て池のかゞみに光そふ礼　紹巴

戸さしもねよの秋は原し　玄甚上人

うらもとき軒は しき荻の露けさ　白

これらおなむらの雨のあと　昌叱

山の気ハきれくたのこる山のかた　法眼院

ゆくるゆふくりのとなきその声　日大

松も見ゆ わかたつくらん　新庄

酒ををす もくさのうす香　玄旨

春のきは出の中に野辺て　玄何

遠のかさの世のたけし　義光

こよひの宿は子ちらん　宗叔

明やらぬ 夜のをとやま　友益

数て有の月に明そて　也後

すみのこしまれの稲穂のめく　也

垂あかぬ人のこゝろもあらき磯　鳥
學ひかゝるゝまゝも分し立みち　白
住山のすゝきの末秋ふかく　此
うらむ秋いつゆのみも世を捨　俳善
おもふそまゝのよ世すかたや月薗は　久
うきよすむのこちすゝむ月年　新
花ゆかしなれ雨あぬまもえすあれは　光
しのふもちめしこのすこし夜袖　四
こしかやく枝のみまたのよのへ明て　旨
やみちのまもなれかたの空も　般
うきうきれこゝろめをけての浜松吉　益
こしもおもはすしゆう花山もと　俊
岸のよ花たか秋ちのふ野らく　巴
さくらのはなとやむしも白うらん　直
ここよなつてかうしの旅のさすらひ　白
あさしもちらぬやまはこ森の風　此

よしなはあらうをかけしくもや　俳善
なよ花やなすうしまゝろなれ　日人
いつもありぬのこしもたゝ生ま雨歴　新之
秋雨まてくさきまよなかちさき　旨
そのこしやうらうねてあきそ　旨
あらましやかきいはり一とせ　敏
山のつのはし　ふるとしまされ
里をいとひくうつりそれやわ　巴
名くぬれはみか浮世とこ夕晴　此
このもみも月ようむまそ雨めれ　益
永かのをるし　ぬ老ひらぬ　俊
たらちさなすみもあら枝の子　白
思ふすとも生の手つめて老の子　旨
何おすてとみの花のや比うち　俳善
あらしきくまうめやこゝまゝめきぬ　直
こゝうのみやちのきし人もなく　仍

まれにかへるも旅はあはれなれ　芝
時雨つゝ世にふるのなまめかしさ　新三
さかりの出せんと乱ハ松にむらさきて　旲人
すゑの床のちりやよつの秋のくれ　叱
さてもしみの唄も川とゝくく夕月の香　敏
晴るゝもしらずおもはる比　俊
月やこうらの谷の流れすみわたる　山
きりの日のうらみもなきの名あさく　吉
ゆかしくもかくれまつりて友名残の跡　叱
ちよしのこの中のあま人の中山をとへ　直
弱りはてゝもとの所はほとゝやいそくらん　白
こゝろ出しかりの山路すりしさき　男人
軍人のちからをあまりハこまつへし　由善
つゝみすゝのものうすかりにしてみのめ　敏
うつすにて咲るしものゝこゑもて花　並
うへくもよりつやきらきらさく比　彩乙

よみのもゝすむ御の花見て　芝
春の野辺のひとあきいけ水　吉
あはれみしうつり行むら麻の内　俊
寺まやふうすてころし花すみん　白
名のことに折むほど使にあらまして　旲人
あはれみつねのはなひのやしも　仍
いそこうらも人まてくハ新まゐらん　舩
ことさくすててさうくれててき　巴
又とまくこそのお尋ねて田舎住　吉
うしちるやしくくさしてみやまま　叱
さそうらなかにむもの笙ね筆おや　新三
帝よきくれて月のさやけき　芝
更りもて水様しきあすおとて　鹿
しるよにかならず〱ほなきちゝる　由善
仕の宿や屋ねの松も花抱　巴
雨かきまや柳まて春の枝　益

夕
奈風は八方のめくみにかすみて　　仍
まことなるよもなし古寺の内　　敲
縁の下ゆすりて法師の宝物　　白
よそにもさそふによしなの月　　俊
時雨る夜もすつても晴てゆきちる　　叱
御階をもちのえすかりよしちる　　新三
弟子が銀のつるかきよの姿ところ　　蓋
あそれゆゑにも行くのみち　　日大
俺ぬ法は住はぬるもつくめ　　法善
新枕宮をわ結ありしぬは　　旨
喜悦もして難所をあしとまでかん　　光
ここらば往おもふべきのを　　巴
さかもも月はひ有明の影すて　　癒
霧ぞ入るるてきよう世の末　　白
桂のちる木のまも遠よみさそふ　　日大
松山の仲の花も一もと　　法善

春年しつる枝おります遠とおて　　蓋
堅やかなる道しるるの行人　　叱
関八州懐かるけまじあつあし　　俊
治りまその国は住まり　　仍
百しも名あまうありあうり我旨　　旨
我のほの君まもぬすまの花　　香仲

紹巴法眼	八	義光	七
玄敲	六	白	八
昌叱	九	長俊	七
香仲	一	日大	八
香法師	九	香仍	
遊其上人	七		
友益	七		
法善房	八		
新三位	七		

地蔵院

七月十九日藤孝公来臨和漢會

秋風をさそふ落葉一葉の月　藤孝
梧涼無暑残　地蔵院璨甫
片晴弓様月
入山ちかくなる日の影　三甫
江の流も深くみえし湊舟　藤孝
源氏物語きく時
氷てもなかの通ひあまく入江の月

元日
あらたまの年立かへる今朝の霞かな

元日年あけて立春なれハ
とし越てけさより春花さかり

試筆
とらハ先よろの春立ころの風

田舎にて
やよひ宵も花咲梅の花

花にさへ夜々露をまつむすふ別菊の
池中はすの花まては
秋の末はやつまみて菊の池水

六月十七日ね　勅使日野弁相伴九ヶ所へ
ほ田辺末飄庵まての佗無り
涼しさ和月もうけ井の浦の流　日大
さけの柳の枝の下の影　香白
されちりし思への里にもなるらん　良元
池をみきりとこゝろ涼しき篇
法の月没ありつまて起別て
桜衣りくの空のたえたえに
おほろ月のきりめや淀の川舟
すゝろにほのはちぬしまきりし
ひとつはや今すきち々の大和寺
さしとめてさしやすよもの空
立夜袖もすへにひとすし

これ立人のまへにらみけし
唐土の俳仙ここにひ定りしく
俳号を明石の舟やよりぬらん
御吉あらくとむ二夜松おろし
ころろうちてのわ雲雨のさ乱れ
苔を遊の子のうこしよりく行うく
せ男も梅か白紙の四つ紙唐二
澤水白くまし の二寸化
よわよわすめねから飛鳥鴨の声
年や雲のいつらまこみをれん
おわれんまくたまてるもし老れし
梅をしもあらかそやぬ神の旅
おろてあゆねこそその色八音
立ちうきしきとこ花ころもきてよ
おもの八うさしの花うかれてこ
五月の都みたをるの松の月

ねやかまの谷のかけつゝ経
さてのたみ三山の知年かれさこて
むすふても久し一夜の軒を
水ま月をむかへのるすみ北里て
そうたのみてへ宮の滴や深うきん
むらも今ちすの驚れたるのつゝ
袖ハらて新まてく門の声
園むのかれもいさむもうらこ雨
田邊に柳の陰あるに所在し時柳は
植付るへきよし御從ひ立時と洗留
やもこらうて葉や柳のさう柳
松下雨か樋一折一さうゑ旦りして
ありて秋夜雨のさま慶
松風やねまをねけ軒の下ふ秋暮
薩凡流下句を付
雲折り月八二三よるく杢の月見

同時独吟無題

萩すゝき原に風とやいふの秋
乱のうつろふ秋の村雨　独吟
定家卿かつらき山の紅葉をみて　浄光明寺
大隅正八幡社領勤落し付物なりけき
の事なりて
木枯をなすけるの衆に落とさる
東三条のやしきまて
氷かるてまのちるとちりけり
いつまでかすてやとはるるの宿
わかさのやにかたとての夏かた　香
波まさとられかのようき出
むろ沢の池おもしいのちをよ
慶長六年十一月廿三日於八条殿
相国の言のはのこる落花
月まちしのなきをきこつし　逢　也

名おちのすしきさらさのやまた姫　也
ちらしれのやまれのこゝにみすまに　占

付句　接句

浅しさは風ふきとしもあけはかり
三日月のひかりをまつてしくれ
こまかなる笹の露やこぼるらん
松虫の声かきりなきこゝろかな
一声ハ鳴もれ行か山の原
松むしの声てふ松むしら
河ハ土もとの水みなきりし
岸舟のおもむきハ棹もさして
いそくもきくもわれぬ絹の音
ねみてもたれ人の名の花陽
ゆきされや寸か細つゞく人
一まこの心の袖の上
夕暮の月ははやくも之
わしのまね哉うつる火
うすきすえりかとこ山の山

河原の秋哉いつまでさらにたゝ
鳴りたる寸の虫の声ハあきかなそ
まつハおれもなれるうきいぬ
すてゝもつきたの井の花ひ
やすこはるゝ露の露
月のきゆるのうつゝの露
その霞ハほしあれはかけ
一枝もおちもしきたれのけ
雪のこゝろの梅花あられさ
あしのもとにうつ音の声
これハ世のこうしも秋を
うむしくこゝろハさらにも
みれもり国のつきはあやさきた
秋ハかす哉されし袖のおもひて
すまゝ
折ちりちらくろよく

まことあるまじく[illegible]思ひて御覧じ
桜さわりいてやよひの[illegible]
春のくれまてみすすこちふく
みかつきわれのこゝろの[illegible]
中将の[illegible]もとゝ[illegible]
[illegible]るいろ[illegible]よりて
[illegible]ひあつむれ[illegible]のしく
[illegible]の[illegible]の月[illegible]より
人[illegible]るの[illegible]の[illegible]
よつ花[illegible]のま[illegible]さ
[illegible]つく[illegible]
あ[illegible]のあ[illegible]
[illegible]もち[illegible]花[illegible]
よ[illegible]わ[illegible]のすむりけれ
[illegible]人のきみすれ
[illegible]

すま[illegible]のこゝろなれ
よつるあふれめかつ[illegible]
いさゝ井の水[illegible]住石して
[illegible]しすく[illegible]佛の[illegible]
[illegible]のはすのこ月[illegible]
春夏や秋冬人の[illegible]
これにて[illegible]
きこもとりの[illegible]
わつまてくね[illegible]のかすく
[illegible]
[illegible]花[illegible]の山
[illegible]くもの[illegible]
よ人ハ[illegible]
杉[illegible]梅の水[illegible]
[illegible]の山[illegible]
[illegible]虫の[illegible]

消る身もつゐにいのちの露の花
いく年まてか田人をも送りし
やすらひて見る子はあさましかりけり
此のつきはてくまし
思ひの外松のかしはまつ
慶長四年二月四日　松下民部少輔興行
君の春ハ幾千とせか松の風　玄旨
柳さくらの色なきもなし　述久
九重の門ハ霞より明ぬらん　兼如
ゑつれりきし宮の残雪
雨はあれはなきものゝきり
しのつ十のころすみ
かの人のゆめのゆきまよひ
下もいさや空のゆくさへ
うつりゆくむらの寺
雨のふるおのやかての
すまにたちのまちちあり
床らくに松の下あはれ
いとむころもまつのまま
うきにハ月おち所
松の代もいつのまにあるまて
みるにハうさのあきの秋風
夕比霜を松むしの声
あつまりてなまく
やうすかの車もさ
月ハ秋のつゆの床
神さひぬ
鳴すもすこれ
すきあ千見
みさわしちや
うきひものこれ

こゝら山く佛のわたる道ある哉こ、
いまの三やよ住つゝるほと
旅ちゝハ袖ひらひらしわすれ
かくちるをさやうて跡ともあはれて
谷りをこにとまし火の庄
さゝ多ちのまたあをの氷鶴声晴て

天正元六月廿四日お勝龍寺あれハ、 不書前巻七百韻

花の紅風さそやまよん久すミ　紹巴
さけつまみの月北月うすき庭　日
雨のすむ垣ねの梅の山のけしく　玄旨
酒す里面のまてるみおすめ　日
諸ともにみ立おり一宿の声　紹巴
身ハ旅よしもいまはくみ見え　日
こゝのそ見此あらし千里の陰雲　玄旨
将するのきの月しわさ紀行　日
ウ
萩薄わか袖ならくふるこすた　日

宇の峯ちれいりなれわつる　紹巴
秋北風更り霧やこうさぬ鏡　日
きぬたまさまにてまいりぬあり　玄旨
月もや入つちつきまのたま　日
あくれいふの山ほしきあれ　紹巴
五月雨ハよとのも限す舟とめく　日
旅くのすさもうつあと　玄旨
なれたきや村のきのれをかつくん　日
里かれハくさの一すち　紹巴
きうれ鶏いそよくのわり書　日
よのむすをつとよまて手づ　玄旨
いとけなきつ乃ゆねといれ庭　日
二
きのゆつきぬかあつよくとしわ　紹巴
きりとこいつし音さうゆ　日
ちとりのたもなす細つてん　玄旨
おとれつゝ十つまのあかやにみ八月　日

あらしの波にとまりなんもうし　紹巴
池水のうへ吹てすゑの秋の月　月
春もよそ千代の声とししもそむく　月
つまさとはわすれん松の神の森　昌叱
人の子のわか山のさかりしさ　紹巴
立寄て志らしの松の初声に　日
おそれるこゝろやこえねつらん　昌叱
あはれにもすそ野の露もとまり　日
この上の氷かすれりあと　紹巴
さえまさりて舟の音の夜のあらし　月
霞の末八重にまつほの　昌叱
こゑわたる雁や月さへかゝる袖　日
むらさきにうつる山のちりかゝる　紹巴
もみぢ葉にかきつる秋風　日
軒の板に此ちりのさむく　昌叱
蛍とふ夕ハなかしの音すゝみそ　日

三

みの事よるまくらのむすしも　紹巴
里つきこほのをすゝけの三年す　月
さのうちちりてくおちしみ　昌叱
のしことハすさるのかりき系　日
つまもくりすなす秋つきこ乱　紹巴
かきつのつけ夕水をきまわりそ　日
なまくもちるも志らまよ井のもと　昌叱
雪とつたにこまかや花のこ風　紹巴
春の雨夜の月のもちなし
新もてそらの月に光もそふ　月
うつみに光ハいつの空いる　昌叱
なれくし中の秋も立こし　月
いつんまし戸のさしくらすき　紹巴
その人とおもひつゝまちすて　月
いむるすきしも見ぬ住の御　昌叱
まつき道ハ数のほとけさき照あれ　月

年のおもかけみえさもあれてうつゝ　紹巴
としふるを君の洞もすみうく　同
足曳の峯の杉の夕風　昌叱
夢や杉夜のうつゝにのこる鐘　同
まねきつゝこそよりおもとめぬ　紹巴
身のいろ見えつゝもこれハ寝つゝあり　同
家はすくにまねかすちらぬ　昌叱
うつ露のむすひの地え尾山嵐に　同
咱ちるれてもさこそしのふ恋　紹巴
守経し姉橋のいさよふ月かけ　同
秋そらはやふりて露深き　昌叱
ましきも手むの月見夜更て　同
立やすらふかりのこゑやの内　紹巴
起わかれをやつゝらる雲中きて　同
このむかひもおつしかよひ　昌叱
恵みしる手習ても書ねる事すそ　同
都の名ハさすかにのこ　紹巴
かるさきをうつしの花も跡見やり　同
宿のうちやあそふ猶まこと　昌叱
よこ雲そゝ春のあけしの名残　同
はるやまゐのあ見えゆきわたし　紹巴
庭の上のうつゝやこゝみえかすみ川　同
あよみ色をよそ梅を見よこゝろ　昌叱
夢路ハ独りつらさをあゝはさそ　同
袖よりちるゝこすの小車　紹巴
まつめすしさゝおれ出すなおもこ　同
かまと我国とよおける氏神　昌叱
唐土のむすきてその紀をひく　同
つるましもおしよしあつさ見しよね　紹巴
百あまりやまさくるしのまゝの秋　同
ねまやしきてねおもわつる道　昌叱
恵のたれぬるあゝるめ夕のうすさ　同

留守ハあらし湯弁当の道　絶
梅の香もまた初音の雪之の露　日
相撲もいつりすて花手折る　青
ちるまでに鳴や寺書の声　日
成りの宿まで來て山　絶
並草よめ挽き挽き沖は舟　日
久しきも風の音を北浪　青
秋の今ま楽がるまて柳原　日
よもきの宿も子のまでつのと　絶
月ま松八のまちれすの友すすめ　青
其花くてしも露みせろ声　絶

九月五日奈良にて宿の亭主を西見して
山風に鹿の音もなし春日野　青
九月十三夜
執りてこそ井の月夜哉　同

山何

春待く窓や一本の梅に花　杜
松ハみとりにあらし雪に庭　白
夕執もや手桶の露にうるみん　吾ら
うすこゝに月ハ名残の空　秋
浦傳ひ我夜毎に来くすく　絹也
去年のあらしハ遠山の陰　素
井波す谷の桜きくして　松陸
見ねしくの花このうすしこ　全宗
ウ
夕霧とてなたる渡し合ふ村落　友盛
ところ／＼の森のみとりのゑ　昌比
言葉うらん扉の声いちらこてん　仙花
月ハ入野の風のたより哉　由巴
そこと表く拝ひさうむかし萩　友益
揺のもり橋の名にうらゝる　松
やすむまくらをかれ友と宿まつそ　白

渡す小舟もおもし山笑斗　秀吉
雲すしも河辺ハ浪のこゑすみ　紹巴
ここよひてもこゝろうき世を　素哉
あさましく柳の末のあれいる　聖護院
このすこハ露の入あひの声　金宗
ふかむまてこすゑの雪ハ埋みぬ　友盛
二
山ハいつくの鳥かへさん　昌叱
寒き白き舟の枝や明ぬらん　玄仍
月影さむき里の夜を　松
秋ハうき枯のとゝまる気色く　白
そよくのとこひかゝる中空　由己
雲ゆく音やうつらふしの夜　秋
おしそいつの九重のうち　素旨
明果るよのあはれしれ契りて　素哉
うつゝもくりかへの夜なき　紹巴
咲つゝく柳ハ庭の花盛

千里の末も分ゆくむ比　金宗
なかれおよふ遠き田面ハ秋盛え　聖護院
ゆふたいまさらの沢水　昌叱
たるまちみ弱やつれていつこん　友益
あかきのますゑの折ふしあけぬる　松
ニウ
面影ハこすもあらねどもおもひ絶　玄仍
夢のりきの枝ゆくるすまく　由己
元くの夜もおもてにはなつしく　昌叱
人まとゝさるる舟の月　素旨
まほらみ尾もわつまる霧の中ち　白
いつ迄まてにとこえ虫の音　紹巴
もみちまたに松ハむかしまゐりそ　松
奥山のふしも木のもと入山　秋
世をすうしやとまて松桂ふし　素哉
またくなるゆかん人の夜こもれ　友盛
萩ハ花つまる根比庭中の床　金宗

三

いそしのまへにかつさしてけり　秋隆
舟とめても文ハ夜くらしさみしく　玄旨
つくミを宿りて宿し出の音　松
朝朗月のよかけ法くのかね　紹巴
けふゆくこの波の秋風　久冨
あらしの横ともなほ海雲に　由己
たつかれのちるもさそけの初鳥　昌叱
松虫の福しもあさよりも果　松
うつむそさかなる桜のまき　全宗
逢事の限りも渡さ添く　白
をとつかいそての濡れ　玄旨
立かへる花吉里やさすらへし　友盛
むすふにもあやなうらみの号　素
まとつすハ苦つとすゝも鳥つまそ　秋
いさ夏をまつくもいたけかすく径　光隆
久方のよのまぬこそハえすなれ　久

三ウ

おもしろきやつれやもゆれん　紹巴
声そふみ巣まても早子すゝめ越　由己
小家さへりき春雨の比　白
香まよふの花をよるにまかれのり　玄旨
おちつもよにをおもふ袖　松
あつれの雪もてまうこ別て　昌叱
はの々光ありきの石　友盛
山ふかきうつもなやすゝめん　秋隆
うら指ハあふむそうみたる露　久冨
豊比家すてしたとよあきそ　紹巴
まおいへのこの人の香　全宗
何のうん宿り花袖の石こ　秋
すゝ通りくのよそ見えくの　由己
うすゝ寸すゝ都の夜半もさそ　素
こゝろ門のこゝろつきく　昌叱

名

ゆきハ白妙のこゝろのうち　松

いちすゝきし小車のあと
河風の音をよその事にして
多羽田のありしいろをなすらん
よもすがら月の光やうすからん
いなつまのよりうつる袖
まの気つかぬ扇をさしやりて
あまとをみかくし引入かつむ
すみ琴のすちをかすん笛の音
りすあいつとかすんこく調べ之
花の色みかりけるよ梅も折
春さくまゝのよろみて物哀
まさきくの紅葉別記りく
こゝろまのあるとこうすむゆたか
明かのいさよいの霧も見ゆ
ゆふつけもあやめもの雪
まかきもハあらしさけき渡るよ

頼隆
秀吉
秋
全宗
紹巴
白
松
昌叱
心前
由己
玄以
友益
白
心前
昌叱
松

夕たちのつし世をの山
中すの夕やき月もさえ
宮こあれなる野の松の声
花ならし蓬の稍が移り合
あらてもすこの奥あり

秀吉
紹巴
秋
白
玄以

松	十
白	九
法印 秀吉	九
秋	八
法橋 紹巴	九
法印 玄以	八
頼隆朝臣	七
法印 友盛	七
昌叱	九
心前	八
由己	七
友益	一
法印 全宗	七

昌叱へ紹巴古今伝受有ニ付テ昌叱興行

たえせぬにおさまれる春の家　紹巴
人のこゝろやわかつむらし　昌叱
秋草もうつし植ねて露おきて　白
とまりにけり窓のまつさき　季吉
日さし遠くうつる小舟の影明　日大
波ようつれる月のすゞしさ　莫臨
ちつ雲に霧のよそひの秋すて　玄仍
おく露にしろき舟はちの末　兼敏
須磨の浦絶くみなすわ風も吹る　友益
わか山の嶺やえれ波あるらん　既立
人のかたにみちのこのくま　小和
をとはれし神もゆつれぬあり　巴
思ひつめのこのにすよしいのらん　叱
つゆもくらさしゆめさまさる　白
あ床つる枕のねも花ぬる　吉

二

やよひの末よするのしたる山奔　大
このつらくおくのうちやうちかへし　臨
まとろみてゆめの山ひとり　仍
秋ふかき夜の上下風さよりして　敏
まつとのくらのうすか袖　益
一夜して月にまかんしら草葉　立
むかしとひこし露の此弟子　叱
萱の屋使虫の音後に細まく　巴
すむ者かれて秋和身すむ　吉
涙や落く雨のそゝくらん　白
思ひつゝかみの上の雲　臨
こゝろくも枝の夕執心のつかはく　大
猿さしてのよる寺に立　敏
あかしまこしつの世も住荒れ　仍
かきのうらさつかれ果し　立
けさのくもひむきしの枕して　益

身はまよれここそも夜ハしづまりき
うち払ふ玉の床や秋よこゝろつらん
まろき根からりあやめ草
ふきあれたる軒のあやめのほのみえて
ニウ
山ハ西の日ひらくしの衣
晴わたる青雲の新やこゝに
木の下居の夢こゝろひとり
甚すしもてこそ夜すがら文届
めさましき茶てもてつくすまじきめ
かなしさは枕ねる世の音新く
何人つやつにつちりのけてん
笛の音も琴のしらべにまさりなり
夜比音かりやもてなす世の戸
手折きて色もこそ見の花盛
さうらし佛やもてまゐらせん
これも今宵の夜立なくて

吐　旨　巴　敏　白　怡　丈　左　仍　吐　旨　巴　蓋　白　敏　旨

分入りてまたさきの谷
月すしもわすれ捨の庵やかくれし
秋のおもこん兄のてきふ田
三
霧立て中河の流すつされく
人ハ何しの浦に屋橋
夕霧の白き花店の屋淋し
つれなしひとりのやとくぐ山あれ
夜ハさて涼しき声放夜よし
としろきこ見ぬ庭前の二の外
化かうらハ牧うりあやめの花れもあさ水
気うちをなひうらぬ袖の玉章
庭くのみ花つくしの奥深き
風すかれ抹れ花み山々こ
たみのうらや白浪立て船よきて
月又一つらこのうこうなるら
隣を知すも庭田のうつ蝶やめり見え

巴　仍　蓋　吐　巴　白　丈　怡　敏　旨　吐　巴　左　蓋　旨

うき人ハまたゆたか穐の神垣
築つきの内も逗留みむすかれ
おかつく松の梢するとますく
ちかれくの御さけ月　麻衣
花もつてわつ道すこに立る袖
一筋よまん世の舞世ちり盃
せすしハとちめし　五百すると河
いすし人を禅定の座に出される
老くの座ハ隠家もうき
友なつつ情あつ和歌散れ
あめすする二寺のあし
書籍を四町の内よつつ人
氷り月のうあけかの
遠さの沢山の鳴たおつ散て
名　一二三の田にほの守すれ
乳も謝さらしのかみする　胡　山

大　仍　叱　帖　左　夫　旨　盃　巴　帖　般　白　叱　仍　旨

出つめつ文ちまし　夜半の鐘聞
うつとめてしろきしろめれ宝の錦
垣なつさしねさしうすの糸
何様の作ハみるもの計
松ハこのすつく池の中鳴
風や花花のしすみこけぬらん
霞の出かりく船よしたる立白
ええすぬや瑠璃のま文縁
芸ぞく侍弱の扉に月氷
秋さそふ時雨くしえ晴まく
つまつてわつたる色ちるの雲
基つてれの柱にこのにちけろし
あつまの望むの小松せ又
名　うつても松すつ邪の手ねまて
絵のきのまりしの中をしらやや
もろこしの文をよやすむかまらん

般　巴　叱　白　盃　仍　夫　左　巴　帖　旨　叱　仍　巴　旨　盃

祈りのしるしあらたなる神楽の山　叱
その人の伊勢にありける寿も見えく　敏
このまゝにうき名やのこる別れ路　佶
月もうつりて袖に露ちる衣　大
秋のすゑきはなかとなきの君　白

紹巴　十二　　莫佶　九
昌叱　十二　　秀仍　十
白　十　　京敏　九
玄旨　十二　　友益　九
日大　九　　既立　七
　　小松　一

天正七年正月十八日定家卿色紙家孝に拝して於紹巴宿所興行之會

船何

うしか草にうつろふめ花の色かな　昌叱
まち遠きかすみの上に消て　家孝
とけ渡る汀も初る月出て　紹巴
見えし様を山田の末　名お
霜枯の鳥羽うちなる秋の風　孝
この寝ざめの数生れて　叱
かて入袖も濡にける夜　お
たのもし身はまたも人の旅寝　巴
いく度のかりねの宿のさすみ　叱
あり明も夜つめし山　孝
さなりしさへよそに行なら立帰り　巴
すへにしもなく只きゝて　お
なくなれ露語をあまつて鳴きて　孝
名のつまをおこす来く　叱
さ夜やあのつきのまくら草枕　お

ちりてもあつまれ世ゝの雨気 巴
かちん酒とむつく八月も年越まて 叱
ちらん扇やひまくの袖 孝
秋のうそ紋の細布に肴もうし 巴
戸さしの内ちまりにこもりて お
むおりね恵隠ハうの惜すく 孝
二
窓人のすゝこれかつむしも惜まて 叱
りす八鶯のあまくいさおやまし お
うすきはかすむともうる朝かの 巴
こちらや雨をみあかる山かする森 叱
入日のむらさくこのつる比り船 孝
ちるきのかすぬ花さくこのうろ塩竈 巴
松のあすは沓や波や越中哉も お
むまてもけむりの烟のおすか桜吹 孝
あせともかくり山尾田かすまらし 叱
五月雨ハ里よりの里は名乾て お

冬もわつまにすこちきく草りく 巴
ふきあれてあらしを尋やハ落桐 叱
すゝのさらのもちのてらい勝 孝
うらに宝もなしの入立月更く 巴
かめ恋しのさきよみのかたち お
ニウ
売子かりてまるてれ宿や昔けむ 孝
り袖たとえ庵のこけたらし 叱
松村の寺のいらのみ宝かなめく お
明さとりなうの俳の声くく 巴
引結のうきをとかすくさむ 外 叱
きうしの極ハのこえすまくちら 孝
ねるときも人の花にみ花猶よき お
袖すそしの藤ハいくとせ 巴
旅人の春をくえ出入 春日山 孝
絶ぬ行やかすみたちのや 叱
むろこれなみの陰をとうすま上兼て お

根さしてをひきぬれのこし　冬き　巴
見えてこのちのはりてや月八三え　叱
むかしのこすあしも祭礼の上るる伝　孝
おもしろの階をつてゆく出て　巴
さらに戸ひらるもあけすの風わ　お
出てゆく寺のよのうつのゝ　孝
くるみの名物をおもよしゑまとる　叱
明石のうつてそしすみわ御出し　お
ともえて千鳥の鳴つるる声　巴
なつまでくの木のかのまいて　叱
やけてかりてや花立月やこ　孝
嘘まこしうかも雨の音すな　巴
軒ちるさみちよう舟のむら弁　お
紙くのこもねもこれし清見縄　孝
こうりありて上神のまへ　叱
のれ砂も花のかりて　りやそ　お

三
雪のあさきれるの　岸　巴
河瀬や花をよせてゆるれん　叱
来ても神風の山風の声　孝
菅原や伏見八流ちこえそく　巴
月悩すさす里人の袖　お
衣うはつちのむさしなりく　孝
秋のあはれ八分人へかすめるを　叱
とまま手八音引も露と清遠　巴
忘れまおゆる井のみ路　お
住吉や松原つくたふゆく　孝
夕べともちるの沖つ白浪　巴
まはたあわし舟も嵐の浮雲に　お
尾の姫やわの道ゆくらん　孝
さらに寒よの露北とありて　叱
四
事うたにありしうちの忠　嵐や
守みて苗代の手ね　作田めり　お

のこらすよのすゞかのゝ音り　巴
言ぬいて咲を一す立とゆらん　叱
あしのゝくもゝ山のはみえ月　孝
大井川あしく落る秋の色　巴
花や枝をそこも只ゆらん　お
宮のしこさのゝ水の流合　孝
庭も戸あかりに立比ゝ　叱
材のゝ花のすゞあ咲出く　お
春のゝめやしい比隔て山きて　巴
入れ比隔る絶て氷のり　叱
けのつとあやひめ字らん　孝
むすしきとの山てこゝ之添　巴
まち留しての洞わ乱しも　お
さらゝぬあめと昔こ文頭たき　孝
よのむの色あて才をうちの里　叱
雑段つや土はし針の名無あり　お

すゞかゝみ音の声厘比流　巴
風わたる柳や春をなるらん　叱
ちるまは論より雪消の薪　孝
あつまりて人あめるこ之比蕨墨　巴
まつれくし甚む年　お

昌叱　二十五
藤孝　日
紹巴　日
人希　日

墟何

雪晴く[illegible]の風かな　江戸 [illegible]

[illegible]ハ[illegible]さゆる[illegible]の月　松

[illegible]も汀ま一席の[illegible]めて　秋

いり江の田面ほのかなるらん　鶴[illegible]

村[illegible]露盃あく寸ろよまん　白

夕ゝ涼しく[illegible]　昌比

行くも[illegible]ハ[illegible]一陰の宮　友國

[illegible]山のさかしき　江戸 [illegible]

材ハ主[illegible] 見は[illegible]　[illegible]

星の[illegible]や[illegible]　柳[illegible]

足弁[illegible]の家[illegible]こ　田巴

つらく[illegible]河原の波　江戸 [illegible]

何[illegible]の[illegible]　國

朝気の[illegible]ハ小雨[illegible]　[illegible]ん

麻の[illegible]も[illegible]山の陰　松

やき[illegible]秋風の月　秋

立ま[illegible]の[illegible]も[illegible]　巴

[illegible]ハ遠[illegible]のうすく[illegible]　白

袖[illegible]花や[illegible]て[illegible]　比

あの[illegible]ハ九[illegible]の春　國

大[illegible]や[illegible]離り[illegible]　古

嵐のさ[illegible]の[illegible]　[illegible]

漕[illegible]浦[illegible]の[illegible]舟の上　陰

[illegible]のけ[illegible]蛍の一村　巴

[illegible]墟の奥[illegible]や[illegible]　字

[illegible]も[illegible]　松

[illegible]度[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]　巴

[illegible]も[illegible]　國

[illegible]の[illegible]　比

[illegible]ハ[illegible]　白

あた人のうらせたる寺井の声　杏
衣の香や芭蕉の陰のあはれ也　秋
月すゝしき人の宗の葉　仙
ともすれハ吹く風もあつき三そ　杉
ころの暑さいつ折りん　陸
二ウ
明暮は詠めすてたるふしの雪　叱
のこりおほしや猿の聲きさ　京
限ある国のほのまくし返り出　巴
こるゝ舟ハ浪のさわる方　杉
紅すす柳の池に浦よりゆく　杏
ふかくもさはるゝ汐のまゝの詠　秋
信すこしき杉の指の池を出　友
壁ハ手にくのかくれの比　以
町よりつまりに音を出　巴
露にぬれさむく秋の夜の風　國
虫の声まつまつて月や更つらん　陸

おくもなよみてき世なまわろの　白
春ハこて花よろをこのけふめく　杉
さるゝに夜の音のつたむ　杏
三オ
露人の氣をとりて入山り　秋
わすれ鳥いつちるらん　陸
西の山は雲のもしらぬ寂光　京
のころも住まし桃のうけ　巴
秋もや来まめり月になまし　一
きめくすのとほのかに見え　叱
注しくらく露さやく潮に立　巴
むらくのころもみちたるの色　杉
大井河のさまの浪に立ぬり　杏
くろたん紺の袖の何とん　友
方くま達取し帰る宮柱　白
ちのおり神もこゝやハ何たるか　國
長閑しよ見るかすき人　巳

三ウ

あるましき友のあらそひん　巴
流人のこゝろそ越れ山の奥　杉
拝まるも敵すゞ代の久しさ　宇
わらしをもちかへての駿ぐ　隆
むかの高古の何右すらやせむ　巴
永くの門ハ柳に立かくし　お
春ハ極久のころと車よく　白
今宵や稲南秋のまえきゝん　叱
隣耳も花ほしよその河橋　杉
あら白き方よわ明ケ亭の門　秋
布さらしをくゐをの一比丹　吉
秋やこゝなるもわきの三升ゝん　盛
機きぬかすれ虫しきあれ　以
吹かへしまあの袂の風定しゝ　叱

名オ

こまのゝまゐゝ登し出しきて　巴
かくさるとも忌さて酔の盃り　白

いろ香ゆかしく扇なるめあん　隆
おさてり夜半の原比屋の末　宇
枝ふしのあしてゆ明ケ短夜　吉
隠し杉ハ木陰よく山のしるしあれ　由
雲ゐや倦む跳波のつゞる　お
あゝくてきらぬの上にこゝろん　杉
胡蝶しくやつミあまつ黒　叱
当代のほのかにつゝくゐこそ　巴
誰とはすしの袖払はせうり　秋
さそてさゆるも打満ハ回し弔譜　以
月もわきらくの住吉の秋　白
うすあゐきん舟にこよのみん　盛
去りや神楽のあくまうちゆ色　由

名オ

篠山の杉み萬歳の色まく　旨
入日かくれや丹南よつまし　お
こゝろのうちくのそめもてり宮の毛　隆

ともかくもすしも雪の業人
菴やすゝすゝの籠やさむき夜
竹よわ奥やいつの冬すゝみん
鶯のやよひをしまず花の底
草ふかき書の末花永日

元禄十五年十二月廿八日

以　此　巴　秋　松

二月廿四日伏見宅梅残花見に入りて歴筆

当座

香も水かゝるや梅の花のかほり　秀旨
うす見る野人をとひてみる　袖
胡まきのかしつかにして宿のまへ　丢
このうつき草との露にぬれけむ　三肩
前回の山花あきみのむらさ見
さらはいつ月も雪なすらん
うれしや夕暮し遠き渡り
とし先をまし残りの別路
かゆう寸扇をかゝへて
ましらの奈の人あや
きくよの出の音に成り月の宿
露よめ来りはりもりあと
達すむ昔の春花をされさせて
やとめなるれす鳥の啼きれり

なまよみの絵ちらしに八あたれけれて
時や北やかるの雨あれ声
松風や月のかけ吹かれ更けゆらん
こゝろ砕けん流すまおしきとゝ也舞
すつかりなりあかきの一時
これまでく神に初しか神雷
猪夜雨筆の車とゝとく野辺へ
思ひかつてひの水にまいつとて
なつまさく捨もつてひかうれし飛鳥や
一とつのすき如流れけかひらん
かゝめ田のきうの下あのほそれ
春なくなてるかしのみゆらをも
おろしをとく舟のほちすゝの水きよく
なすみのまゝ下くあみわつとれ
あまなまやうの石川のま成ゝ也
雨八しらてとつてしゝらのめの宿ますして

おとろへくほとのなすら神のまる
いさみのりしへハやさしかねらん
かミにまつりあけのひもりた
ぬすしへの流ハ海弁のニ而ゆく
山住の人やおめらん花のね
言葉はミとく春のこのきすち
思ふつのまゝ和ゆきて絶つる
いそののこ布海の高極橋かし
夢ちとさらへまゝあはさむしや
うはハおめつさく村の市し集
雨のかみ野のやゝ水の音
うちらよこうひ北まのちゝめしつ
なくに梅の匂ひを袖すれ
いともつらうも春のたき稲
すまきハ戸わかるえつりの西乱
松の葉も折とつけにあつまれく

あきかぜハつきぬれかまし此秋風よ
ゆふへの露をわけ虫の声
あつめゆくなすくいく　村信
時雨れける車もさびしや
月もれハのかし此庭の秋の声れ
袖をハ人のまちよやの露
流るもすこれやをられけれよ
すきこの人すゑ田の小笠此数て
ちそこかしよりあやさこにさす足
峰こひ身のうつまし峰の　省
里に出く佛のおかすゝ平生
やまの露り住つくるほと
梢はとにいとひそすれ
かまくもや寸風のあらき
風露
くちこ人老の墨此のすきほりの古寄此露ハ
のかと

うつきそしきゆめのわすれもこすまきこうすハ平かの海
萩露
いろ萩の袖ぬらしうん萩の花
はかつる萩の露此つまてかこれ萩の花露
山梢
梢落ちもさしなれしやし山露のこまし
峰おこし谷のおかやし松風
夏
峰の花也足軒　真りよ南庄
遊浦
すきころ浅のりなひろや遊の浦此
浦鶴
浪の音もさまなる住の江鶴遠き梢風
かなる人のいくの世の海鶴の松の雨久
七月五日
北方玄真尉真り
萩の花秋の上ゆつれ庭哉
月も軒ならくかりの露
玄旨
之昌

蘆よりくれ西の空の明行て
鳴すてし橘ハ口つきの雛ゟ
友と林とのけりをんみとから
里ときえてしものとえりけり
すそきく弓松すち橘の花やちて
ときみのころやみよのさん
又あはさふよるまわ日の立
うちみて束の月りなりま比
り水もよの河土の若鮎つく
とれ哉とこの花もやられ桜月
こころまてゑとよの心中まち
たのきろてましの夜鶴のこちち
此ころハ煙をまれ富士北山
なつ兎のころも雲のむらく
立つくれ泉水の山北峰
このらみく花さらんて和契なれ

光廣

祈まつけるみ神めし　光胤
月の国さう月すこのまわ舟
林すたくふ秋のみすしき　一枝葉
与ふつかすみ代のおこえし浮やえ
はるし和おやの家の風ちすま
下しハ又すれみ此友なすひ
うち遠ば来もあまつ名残そ
徂すりの軒をあるかまの風
雨のあとさとれこの葉虫
村鳥の初日出ゐさうて
汀の氷とろく　浦泥
うこりのきの君のあうら也
帆ほとの末もすくらし花袖
あすハちらんのさ花まの本
雨けりすやさく山桜の花ものそ
七夕又七遊し　係し　時雨庵

久しく住わひける舟のうちもなくなく衛士のたく火のかけ

九月七日三井寺にて興行 聖護院殿有御詠道澄御発句

秋の夜は三井の清水に月をあらひてすむ心かな みはしの水 [illegible]

花は春

さらぬ三井の流をもみな人の水鏡すめりつつ [illegible]

十一月十八日御会 [illegible]

霊山山荘にて [illegible] 将殿和哥会

[illegible] 聞をと送り給

[illegible] 楼上初雪

暁見山雪

述懐

さらぬ文もちなほすてし秋よりも [illegible]

秀頼公初祷として小坐百句 花

[illegible] 住吉の社にて古今相伝

法楽のうたの住吉の [illegible] 伝て奉納し

世足軒久高同国住吉在住 [illegible]

山田勅定有て [illegible]

遂て上洛付

わすれすよつるきつる [illegible] 友鶴の [illegible] 井に [illegible]

立のちのよは井に [illegible] 友鶴のもよ [illegible]

慶長四八十八大閤一周忌懐旧連歌

山中山城守於伏見宅興行

見し人のなつかしさに [illegible] 花

空くもとふらし袖の春雨

夕への宿かるの露ゆく友そへて

こゝろある井の窓とも行ん夜なかさて

うらみの一こゑもほとゝきすの音

まさるみのほとこ立きこえねぬり

あさゆふかまるの雛の里はとき

ふるむすもあつめれ松さびれ

あさふけゆく山の井にみ水

軒のすゝれにおろすまなけれ

袖ぬらす旅の奥のへ小車にて

しをりつゝきしや葉もまきそえん

吹いてきけるあふしきりくも

名のみはあはれて壇ちりも

すらりか国にこつはやはら

さいかのさへこのころの滞第子

又まさしくまの春すれむかしあらく

長俊

文閑

こゝろやり誰とゝよすくの記

み越ちゝあしの屋やしまかれ

まつるもうゑとくすみを尾花そ

かめ人まよひとかのおち草

粋なれ嘯月そおもき夕暮く

うきねく秀みぬるすきゑねく

たゝさしもやらねあれ板の関

おさゝれの流園ゆつかのけるとく

慶長四年　日五年十五真　玄旨

右以自筆之本書写校合了

天正二年六月廿二日

賦花何連歌

涼しさもうつろふ色のいけ水　玄哉

夕立のこす庭の松か枝

雲よりも山越軒の月清く

とをつはねのほのかなる空

旅の袖おもひやるらし秋さむし　三

霧はれわたりつゝゆふ暮

冬くの草乃末葉もかれそて

あさま野原のなかのわけし

山さとのうへ家のこかへ入日影

あらしまつ浦しほねとやかなし

身やさしむすびもあはれぬ

ともの友も夜ものうつ

さしこもる門もつくりおく子をも

すむ人さへもうとき古寺

藤孝

昌叱

雅敦朝臣

紹巴

玄哉

心前

宗及

兼伯

意宗

了玄

重経

藤孝

昌叱

雅敦朝臣

一夜のほとはさしかし山の奥
あつさみのこゝいるまゝよし
秋のよのやしつよろこふてる
宮木のはいつる月をさき乱
何毎をや吹ける風のさそふらん
河ちもも絶ぬつるり限
おぬいつる花なれ何をやまの山
うすこ絶わつる松の道
きさこそ春の宿の柳さき見
よつみのます近くなゆゆく
これのよつをみ思ふる郎出
草のおかりの何れさりけん
とまりさへみちくへさる煙
笹のくれ行すさの月のこ行
あさはのうけるとのこる花
春わすれけすもよのこ絶

紹巴
玄仍
心前
宗及
英怙
兼如
了云
昌叱
友存
紹巴
雅敦朝臣
心前
玄仍
英怙
宗及
友存

宇治もうくのかみの夜すまて
すきわたりしものこふ
あらた田の中をみちくる水車
さとやしおもおろしあふらん
雲のくるやかれあふらん
こわよいおさゆく野道の
霜のやわすちつき
ころもさしのうちの梅の
あまりてたこあふれ春
ろふわよろるし志はの浦
つねのへの風も
これのわするも
しきしの月や有絶
すまさそあれはやよ
秋のくなきてのけさ
あれもよるひぬ

昌叱
了云
紹巴
兼閑
心前
雅敦朝臣
英怙
紹巴
了云
昌叱
友存
玄仍
心前
宗及
雅敦朝臣
友存

若としよわさくやきさしてさむの道
ゆきまよふねさする風の中しふかき
都人ゆかさぬ花の木かげにたち
さかしくなかさる袖くみかはしぬる
いちの日も氷さえはまさに立さまて
はるかんほとよりぬるき舟
さくら中よ淀の辺の夕ぐれの
うつゝとすれは月も霞こし
をおもはゝあらもすさわの小萩原
ゆめへはひとわさし鳴声
ふるさとの秋なつさし山すみに
よ川の風や立つてもの音
かよひ路もすれはなかぬ雪の中
まとはるはるきはく鳴きる
おれふしもうせのよにいこしも
思ひの座た軒そふるまく

忠円
行お
紹巴
昌叱
尚存
紹巴
行お
玄哉
宗及
忠円
昌叱
英佑
非数胡に
尚存
紹巴
了玄

五月雨に家をもさそふ梢かな
みなわのうきわらかまむしら浜
うきしこもるほとはかのさと柳
うつしてうらる九重の春
あけしさしこそのこのまか越なかな
ちらるもしすそさくつこみの浦
また行うこえや浪越えなきのわか袖
わのすむこりのうちく御子
へみけんすくしき秋の夕月夜
ねやのすまさきおきかの竹の露
むしの声遊すねよふ月に幽て
あきれはいのちのうきかはるく
むしくひきもこのよにほとる花そ
すてゝはつゝ羽黒山のわく
はなちしもさちる花のうつりて
よるそかなしめ月春のゆくほと

英佑
紹巴
尚存
行お
紹巴
昌叱
英佑
非数胡に
了玄
紹巴
行お
忠栄
昌叱
宗及
尚存
千式

雪ハ花とゆる法のまことうきしあつら　紹巴
ほのけつゝまよふこゝろの松花盛　心前
ふと見えくるまハいつよる思ひつゝひ　忽宗
おち跳けるまの春のしら演　蕉孝
風のまゝにかりみえ花の折あそびて　昌叱
わとものあかつきさそはゝくるま　了云
さしかゝりかゝるも雨のそれなり　宗及
秋のほのみのつま見てゆくえ　英怡
なまよ夜もおもしろ月のかげ雨そ　雅敦朝臣
こぬ人まてハ袖の月のかけ　蕉孝
ちさわこそあみこゝろさき花　紹巴
よもひかりてもなつゝあゝあく　昌叱
うらみをもとのうらみうちけそ　心前
なまめ中のおもひくてこわ　宗及
しれもつさうみ人音さえ雪ゆきの秋　英怡
うちさ見えそのあかつ池のみ　了云

うちつれも嵐のいつちわかるゝ舞　雅敦朝臣
まつの枝をやゝあらうきまの雲ゝ　紹巴
長閑なる夢よまよふ秋の夜あさ　昌叱
夾ゝさゝや光の友となすゝ舞　蕉孝
これにあて風もいとゞみ夜のかり　玄哉
流るゝわのさ雨てな朝かすき霜　宣稽

蕉孝　十三　英怡　九
昌叱　十二　忽宗　七
雅敦朝臣　九　了云　八
紹巴　十四　宣稽　二
玄哉　七
心前　十一
宗及　八

九州大學圖書印

百 [illegible] 五